男子校を恋愛で

It

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
男子校を恋愛で

【Ｎコード】
Ｎ３９７５Ａ

【作者名】
Ｉｔ

【あらすじ】
男子校・高校２年の田中聖大。普通の高校生だが、彼の環境は少し異常で従妹とちょっとした許嫁関係を結ばれてしまっている。従妹と結婚したくない彼は数少ない異性との交流がある４泊５日の修学旅行で恋人を作ろうと試みるが…。パッと見恋愛・実はコメディー。そんなノリを目指してみました。題名ＢＬっぽい気がするけど実はそんな気はまったくないというＭｒ．肩透かしでもあります。

第1話～夢とバス子ちゃん～（前書き）

恋愛ものの皮を被ったコメディー×コメディーです。暇つぶし程度にどうぞ。

第1話～夢とバス子ちゃん～

・
・
・

俺はさっき寝た、はずなのに、今こうして立っている。布団から起きた記憶もない、なら、何故起きているのか…。
そうか、これは夢だ。いやぁ、夢と気づかれる夢とはなんとも間抜けな夢だ！夢よ、貴様の正体見破ったぞ！何がおきても俺は惑わされんぞ！はっはっはっ…はっ！
ドキッ！
背後から、何かを感じる。胸が自然と動悸をはじめ、顔が赤くなっていくのが自分でも分かる。感覚で背後には何がいるのか、分かってるのかも…。でも、確証はないのでしっかりと背後を見て確かめる。
すると、そこには予想通り…いた。何がって？俺の幼馴染。とは言っても、俺は中学入学の時に他県の全寮制の男子校に行ったから、彼女の顔は小学校時代で止まっている。今、前にいる彼女も、勿論のこと小学生サイズ。
彼女の名は…そう、藤本（ふじもと）　優（ゆう）。身長は小さくて、おかっぱ頭で、目は眼球が落ちそうなほど大きく、口は普段小さいくせに笑うと妙にでかくなる。
あと、誰にも言っていないが、俺の初恋の人だ。ちなみにこの恋はまだ終わってはいない、と、自分では思っている。
「な、ななな…何し二来た！」
俺は心底臆病なのだろう、喋りはどもるし、声は途中で裏返るし…。しかも、「何しに来た？」ってなんだよ…。
彼女は何かを言おうとし、口をあけた。しかし、俺の耳には聞こえない。何故なら、次に流れてきた音がかき消したから。

「おい！起きろや！セーダイ！」
『セーダイ』というのは俺のあだ名で、由来は俺の本名『田中（たなか）　聖（まさ）大（ひろ）』の『聖大』から来ているらしい。まぁ、普通はそう読むよな…。こんな名前を考えた酔狂な親に乾杯。
「んあ？あぁ？まだ7時にもなってないじゃんよ。朝練まであと30分もあるし、あと25分寝かして…」
「はぁ？自分、何言ってはるんや？今日が何の日か言ってみぃ？」
えーと、昨日は11月20日の日曜だったから、今日は…21日で…あれ？何かあったような…。インターネット記念日？いや、あまり関係ない。早慶戦？かなり関係ない。じゃ、なんだ。
「おいおい、今日は修学旅行やろ？早よ準備せんとおいてってまうぞ。ダボが」
そういわれて思い出す。そっか、今日は修学旅行か…。って、ヤバ！集合時間まであと20分だ！集合場所まではココから徒歩10分、早くしないと教員に殺される！
「うぁあああ！すまん！久保！ちょっと待ってくれ！」
「あぁ、早よせぇよ？あと5分したらマジで置いてってまうぞ？」
今、俺を待っている身長200cmの化け物（自分では199，7cmだと言い張るが）久保（くぼ）　貴洋（たかひろ）。
俺と同じバスケ部で、西日本のあたりから来たらしく（久保は出身地を聞かれるたびに別の地名を言うのでどれが本当か分からない）、中途半端に関西弁を喋る。あと、俺の唯一無二の親友とでも言っておくか。
「ほら、早よせんとマジで見捨てて行くで？」
「わーってる、わーってる！…ほら、出来た！すまんな、行くぞ」
・
・
・
「久保貴洋、田中聖大、ただ今到着ぅ～！」
4泊5日分の荷物を背負って、久保と俺は集合場所に到着した。7

時１０分、まぁ、合格ぎりぎりラインだ。
「荷物はココの中に入れてくださいね」
にっこり、バスガイドさんの素敵スマイルが炸裂する。修学旅行は今回を含めて3回目なわけだが、その中でダントツで一番のルックスだ。ってか、日本でも有数の美人バスガイドさんだろう。そう断言できるほど、彼女の容姿は整っていた。
「ウホッ！にゃひひー♪当たりや！当たり！なぁ、セーダイ？」
「あ、あぁ…。そうだな…。ちょっと、落ち着け。な？」
ドスッ！
バスガイドさんを見たせいで興奮が最高潮に達していて、理性の欠片も残っていなさそうな久保の腹を殴る。足長いし、身長高いし、顔もいいし、気前もいい。さらには運動神経抜群のこいつのファンは同年代の女子に少なくはない（ついでに、同性からもファンが多い。どういうファンかはご想像に）。でも、この好色っぷりを見たらファンが何割減ることやら…。
「相変わらずだな、ドツキ漫才！いや、夫夫漫才か？このゲイめが！」
既にバスに乗っているクラスメイトから野次が飛ぶ。
「うっさいわ！松永ぁ！つーか、ゲイじゃねぇっつの！」
バスガイドさん目を向けると少し困った顔をしているようなので、俺は久保を引きずり、乗車する。
「んで、セーダイよ。どや？あのバス子ちゃん可愛いと思わんか？」
「まぁ、確かに可愛いわな…」
理性を取り戻した久保は再度その話を俺に振る。
「んーでも、いくら可愛くてもお前には愛しの許嫁がいるからなぁ」
背後から松永の野次、うぅ～ん、最も飛ばされたくない野次だな…。
「松永！てめぇ、知ってて言ってるだろ！その許嫁が滅茶苦茶ヤバいことをなぁ！そんなこと言う奴にゃあ…こうだ！」
ギュッ、松永の首を掴み、力いっぱい締め付ける。
「知ってるから茶化せるんだろうが。って、ぐぇ～、ギブギブ」

ここで出た、俺の許嫁。まず、知ってもらわないといけないだろう。
その存在を。
その許嫁は俺の従妹で、小さいころからの仲だ。向こうは一方的に俺にベタ惚れらしく、俺の親と彼女の親との間で勝手にある約束をしてしまったのだ。
その約束が『従妹が１６歳になったとき、結婚相手が決まっていないと、有無を言わさず婚姻される』というもの。
まぁ、彼女が俺の好みに当てはまっていたら万々歳なのだが…。あいにく、俺の好みはうるさい。ってか、俺じゃなくても彼女は勘弁だと思う。自分のためなら他の犠牲をためらわない性格（自己中）といい、凄い容姿といい…。もう、何と言うか、完全なボール球だ。ビーンボールどころか、『バッター・俺』の背中を通り過ぎていったような…。乱闘ＯＫかい？
「んで、バス子ちゃんは射程範囲なん？彼女候補に入るん？」
「まぁ、確かに可愛いが…。ってか、バス子ちゃんってなんだよ」
俺は必死に話を逸らそうと努力する。
「可愛いが…。何なんよ？出るとこ出て、引っ込むとこ引っ込んで、ばいんばいんやんか。どこがダメなん？」
「・・・。お前、表現が凄くおっさん臭いな」
「んで、可愛いが…。何？」
こいつ、他の話題はとことんシカトか。いいキャラしてるじゃねぇか。
俺には心に決めた人がいるから、何てことは口が裂けても言えない。と、なると…こういう場合は…。
「いや、ダメじゃないんだ。むしろ全然ＯＫの方針で」
嘘でもこういっておいたほうが良いだろう。ってか、完全に嘘じゃないし。つーかアレだ。正直言って滅茶苦茶好み。
「ほぉ～、そいつはそいつは…」
周りの奴ら揃ってニヤニヤ。
「じゃあ、何だ？お前らは彼女が可愛くないとでも？俺は素直に言

うね、滅茶苦茶タイプですよ。決まってるじゃないか！」
何か、俺が大声で喋っている途中に、周りの会話が完全にシャットアウトされていたようで、バスの中では俺の欲望丸出しの声がこだまする。
「おいおい、田中。お前何大声で言ってんだよ」
担任が必死に笑いをこらえながら、俺を名指しで注意する。
「マジかよ、頼むぞセーダァーイ」
周りも上手くそれに便乗する。
「ぁのぉ～、田中君って、どなたですかぁ～？」
ばいんばいんのボディ（久保談）に似合わず鼻にかかった甘い声。
顔は恥ずかしさからか真っ赤で、マイクを使ってもその声は小さく、消えそうだった。
「こいつで～す。こいつこいつ！」
久保が思い切り俺の手を引っ張り、バスの廊下で彼女とご対面させる。
「「あ、あ、あはははは…」」
彼女と俺の初のご対面は二人とも、苦笑するしかなかった。
「名前、何でしたっけ？」
言うに事欠いて、俺は愚挙に出る。これじゃあ俺がますます軟派っぽいじゃあないか。こういうのは久保の役目だろ。
「えぇ～と、高見（たかみ）　結衣（ゆい）ですぅ。不束者ですが、どぉかよろしくお願いしますぅ」
すまなそうに、ぺこぺこと頭を下げ、俺も役目を終え（？）席につこうとしたその瞬間。
「結衣ちゃん何歳～？」
「スリーサイズ何～？」
「彼氏いる～？」
などなどの質問攻め、質問攻め。聖徳太子でも聞き取れないほどの質問攻め。
「ぇ、ふぇ～！そ、そんな一気に聞かれても困りますよぉぉ～」

実はこれが初仕事らしいバス子ちゃんこと、高見結衣さん。彼女のバスガイド人生も前途多難のようだ…。
俺も初日からこれじゃあ、ヤバイな、と思いながら岐阜→福島間をバスは揺れる…。

第1話～夢とバス子ちゃん～（後書き）

友人の「恋愛ゲーのシナリオみたいな奴書いて」という発言が元で始まった行き当たりばったりもいいとこの、小説とは呼びがたいものですが…。それでも、最後まで挫折せずに（すでにしてる節がありますがw）突っ走ろうかと思います。どうかよろしくお願いします。

第2話～ユージンとバス子ちゃん～（前書き）

読者の皆様、ズブの素人のＩｔです。
しかし、完結は必ずさせますので…！どうか見捨てないで欲しいなぁ…ｗ

第2話～ユージンとバス子ちゃん～

「ぁはい、皆さぁん、このインターチェンジで１０分ほどのトイレ休憩を取りますんで～…ぇ、えぇ～っと、その…出来ればみんな外に出てもらいたいなぁって…」
今日、２度目の起床は彼女の子ののんびり甘い声だった。いつもは目覚まし時計か、男の声で起こされる俺は、なんとなくうれしい気分。
「ほら、降りんと、迷惑かかるで。われん大好きなバス子ちゃんに」
ぐいっ、ぐいっ
久保に体を揺り起こされ、外に出る。するとそこにはバス子ちゃんこと、高見さんがいた。
「ど、どうも」
俺は少し頬を赤らめながら、彼女にぺこりと礼をする。
「んむ！にゃむむっ！えほっえほっ！ひゅうぅ…、たにゃか君。おどかしゃにゃいでくだしゃいひょお～」
彼女は涙目になりながら、うぅ～と唸る。この様を見てるととても２１歳には見えんのだが…。まぁ、それはおいておこう。
「何か食ってたんすか？」
「ん？そーだよ。そこで問題。私は何を食べてたでしょ～っかっ？」
さっきまでの涙目が嘘のように、悪戯っ子のような笑顔を見せる。喋りも今までのおどおどした感じがなくなり、元気な女の子の喋りになる。
アレだな、食い物のことになると元気になる奴とか、そういうタイプの。
「「・・・」」
俺と久保は彼女のある部分を見つめる。口の周りには、肉まんの皮と、カレーのルー。多分、アレだろうな。うん、アレ。二人ともチラッとお互いを見て、目で答え合わせをする。

「わかんない？あと、7秒だよ～。難しすぎた？」
当の本人は気づいていないようだ。決定的、というか致命的なヒントに。
「5・4・3・2・1・しゅーりょー！さぁ、お二人さん答えをどうぞ！」
何か、彼女の顔がすごく勝ち誇っているのだけど…。答えたほうが良いのか？正直に…。うぅ～ん、悩みどころ…。
「カレーまんやろ？」
あ、俺が答えるかどうか考えてる最中に…。
「え？な、何で？何で何で何でぇ？」
「いや、口の周り、拭ってみてくださいよ」
俺はなぜわかったか、ネタ晴らしをする。
「ん？別にどーもないじゃないですか！ただ、カレールーと皮がついてるだけで…」
彼女はそういいながら、ぱくり、指についたカレールーを指しゃぶりしてきれいになめ取る。・・・。コレだけ言っても気づかないとは…。どうしよう、この人すごく重症だ。
ビュッ！
いきなり吹いた強風にあおられ、バス子ちゃんこと、高見さんの帽子が宙を舞う。
「あ、ボーシが…」
彼女が今までの表情から一転、急に泣き出しそうな顔になる。
どうすれば良いかとあたふたあたふたしていると…
「セーダイ！リバァンッ！」
久保の大声に、脳を通さず脊髄が反応する。つまり、反射だ。
「シィッ！」
俺は声とともに跳躍していた。考える時間もなく。
ぱしんっ！ズダンッ！
帽子のキャッチ音と、俺の着地音。冬場なので、足がジンジン来る。
いってぇ～。ちくしょぉ。

「はい、高見さん。帽子」
ぽふっ、俺は彼女の頭に優しく被せてやる。すると、彼女の目から涙がぼろぼろと零れ落ちる。
「ありがとうございます、ありがとうございます…」
彼女はわんわん泣き出す。ばつが悪い。何か、はたから見ると俺が泣かしたみたいじゃないか…。
彼女が泣き止んでから、俺らはそろってバスに乗る。
「なぁ、久保。俺があそこで取る理由あったのか？地面に落ちたの拾えばよかったんじゃあ…」
バスに乗って、気が落ち着いたところで、なんか気になったから聞いてみた。
「駄目やなぁ、せやからセーダイは彼女でけへんねん。こういう派手で見せ付けるようなデモンストレーションが女ん子の心に響くんやないか」
こんな女心のおの字もわかってそうにない奴にこんなことを言われるとは、屈辱だ。とっても。
「でも、まぁ、一理あるかもな」
彼女はそれで俺に感謝してくれたわけだし、まぁ、結果的には良いほう（フラグ立ったか？）に転んだ…はず。
「つーか、何だ？気のせいかお前は俺と高見さんを意地でもくっつけようとしてないか？」
なんとなく、脳裏をよぎった疑問を友人に投げかける。
「いや、だって、われ、修学旅行中に彼女でけんかったらあんのブッ細工なネーちゃんと結婚せなあかんのやろ？男子校の全寮制やから、事実上は。そらユージンとして、そりゃ見過ごせんわ」
「なるほどなぁ、でも、お前なら俺がどう転んでも楽しみそうだけどな…」
久保の言葉に感心しつつも、なーんとなく、気になるんだよな。こいつの事だから罠の一つや二つくらい仕掛けてそうな…。
「まぁ、どう転んでも楽しむんは俺ん性じゃ。でも、仮にもユージ

ンの恋人さんなんやし、なんとなーく可愛いほうが俺も気分がえぇやろ？」
「いまいちわからんが、まぁ、納得した。つーか、何だよ。その俺が高見さんにベタ惚れみたいな言い回しは」
「いや、そういう意味じゃなくってや。別にセーダイの惚れた女ん子やったら誰でもえぇんや。そんなわけで、まぁ、必死こいて彼女作れや。俺も手伝ったる」
「どんなわけだ、どんなわけ」
俺はすかさず突っ込みを入れる。コイツをこれ以上暴走（饒舌に）させたらなんかマズそうだし、釘を刺しておく意味も込めて。
「どんなわけだって良いやん。楽しければ」
「ま、そだな。それ聞けばお前らしくて安心する。さっきまでのお前はお前らしくなくて気色悪かったぞ」
「何？人を思う俺は俺らしくない、と？」
おどけながら彼は笑う。俺も、つられてついつい笑う。本当にこいつはいい奴だ。

第2話～ユージンとバス子ちゃん～（後書き）

第2話、この辺りはやはりギャグがメインになってくるのですが…ギャグもいまいち決まらずいまいち何がしたいのか…。それでも「最後まで付き合ってやる」という方、いましたら本当にうれしいです。次回『第3話～【何の因果か】ホテル・希望閣【こんなボロ旅館に】～』も、どうかご贔屓に。Ｉｔでした。

第３話～【何の因果か】ホテル・希望閣【こんなボロ旅館に】～（前書き）

読者の皆様、いましたら本当にありがとうございます。Ｉｔです。
今後もこいつらの怪しいお喋りを楽しんでいただけましたら最高です。それでは、第３話をどうぞ。

第3話～【何の因果か】ホテル・希望閣【こんなボロ旅館に】～

バスが止まり、俺たちが４泊５日お世話になる『希望閣』とか言うところに到着。
久保とバスケの話や、音楽の話などを話していると、案外早くついた。
「うぁっちゃぁ～。希望もクソもあったもんやないな。おい」
バスから降りて、開口一番に久保が俺にだけに聞こえるように小さい声で言う。
「まぁ、俺ら４５０人と、もうひとつの学校も泊めるんだし、そんなに高い旅館なワケないだろ。大部屋ばっかのボロ旅館だって想像つくだろ。」
「そらそうやけど…。コレはヤバすぎんか？」
確かに…。と、喉元まででかかったが、お世話になる旅館に早速文句をぶっ放していてはいけない、と思い
「ってか、高見さんとはここでお別れか…」
話を逸らしてみる。こいつが食いつきそうなネタを出して。
「いや、安心しろセーダイ。帰りのバスっちゅうチャンスがあるやろが、諦めんのはまだ早いで」
「帰りも同じガイドさんとは限らんぞ？」
疑問をぶつける。
「大丈夫、そんときゃ帰りのインターで猛攻撃や！」
この手の話になると、妙にうきうきしながら話すよな、こいつ。
「って、ほら、高見さんが注目してくださいって言ってるぞ」
このままだと、収拾つかなそうだから、また話を逸らす。
「えぇ～っと、この旅館が皆さんが４泊５日間お世話になる『希望閣』で、こちらの人たちがその旅館の人たちです。
・
・

・
スタッフの紹介やら何やらが次々に進み、俺たちを乗せてきたバスが去る。
「あれ？結衣ちゃんは何で乗らないんですか？」
松永が、バスを見送る彼女に問う。
「ん？言ってませんでしたっけ？私はこの５日間バスガイド兼看護師の役割で来てるって」
「な、なんだってー！」
俺のクラスメイト全員が一斉にＭＭＲの隊員になった。
「んで、兼メイドさんやな…」
ボソリと横で久保が怪しいことをつぶやく。・・・こいつ、コスプレ趣味あったのか？ガイドにナースって、確かにメイドさんでもプラスされたら相当おいしいけど…。
まぁ、あえて聞かなかった事にするとしよう。
・
・
・
「なぁ、具合悪くないんか？」
何回目だろう、久保からこの言葉をかけられたのは。いい加減頭が痛くなってくるぞ。
「あぁ、お前のたゆまぬ努力のおかけで頭が痛いよ」
「何！そいつは大変やな！早速医務室に…」
嫌味たっぷりに返してやったつもりだが、こいつ…。
「ほら、俺が担いだるから医務室行くで？」
「いや、いい。さっきのは冗談だから」
「なんや、詰まらん。張り切って損したやないか、ボケ」
こんなやり取りを夕食の時間までタイマンで続ける。同室の友人に助けを求めても無理無茶無駄無謀その類で一蹴される。
『上之保学園・前橋高校の皆々様、夕食の準備が整いました。宴会室までお越しください。繰り返します。上之保学園・前橋高校の…』

「お、メシやな。続きは食事中にな。ってか、前橋高校ってどこやろ」
「多分、俺の実家の近くの高校だと思う。つまり、群馬な」
久保の問いに、確かではないが自分が考えた答えを返す。
「そうか！じゃ、幼馴染とかいるかもな。何かの恋シュミみたいな展開で」
「セーダイ、知り合いに可愛い娘いたら紹介しろよ」
友人達が一斉に俺の言葉に反応した。こいつら、相当溜まってるな…。
俺が久保に攻撃されてたときは何も反応しなかったくせに、こういうときだけ…。まったくこいつらは…。
「あぁ、分かった分かった。でも、いないと思うぞ。多分。いても共学だから付き合ってる可能性大だ」
「いや、大丈夫！いるはずだ。可愛くて、彼氏がいない奴！」
どこからその自信は湧き出てくるのやら…。でも、今の俺はそんなことに構っていられない。
『幼馴染とかいるかもな』
この言葉が頭に引っかかってしょうがないのだ。今朝見た夢とも見事にリンクして、何度も何度も頭の中をぐるぐると回る。
「どーしたん？セーダイ。ボーッとしとらんで早よ行かんと置いてってまうぞ」
「ん？あぁ、すまん。久保」
さっきから頭に引っかかっているこの言葉の意味がこの後１０分後に簡単に分かるとは、このころの俺には思ってもみなかった。

第3話～【何の因果か】ホテル・希望閣【こんなボロ旅館に】～（後書き）

如何でしたか？
次回『第４話～宿敵魔女と、初恋幼馴染とダブルで再見～』も、貴方様に時間の都合のつく限り、宜しくお願いします。

第４話～宿敵魔女と、初恋幼馴染とダブルで再見～（前書き）

読者の皆様、毎度毎度のことながら有難うございます。第４話も、ゆっくりまったり楽しんでいただければ幸いです。

第４話～宿敵魔女と、初恋幼馴染とダブルで再見～

カチャカチャチャ…チンチンチン。
箸やスプーン、フォークなどと皿が接触して鳴らす音は５分前あたりから聞こえる。
俺たちはこの宴会場について、用意された料理をあいつは７０点ってとこだな、いや、６３点ってとこだろ。うそぉ？お前厳しすぎ～。とかまことに勝手で失礼ではあるが前橋高校の女生徒を自分たちの視点で勝手に採点などの談笑をしながら食べている。ちなみに、俺らの班の隣の席は空白。
おそらく、前橋高校の誰かがが座るのだろう。に、しても、ひどくドン臭い奴らだ。アナウンスがあって、もう１０分近くたっているというのに…。
「あーやばっ！みんなもう食べてるじゃん、早く食べないと！」
入り口で声がする。周りの談笑を押しのける大声で女性独特のトーン。つーか、一般の女性よりさらにもう一段階甲高い声。普段、男性の声しか聞いていない俺らの中に高い声が好きな奴がいるなら、それだけで発情してしまうだろう。実際、俺は一瞬だが、くらりときたし。声は非常に可愛らしい、が、顔はここからじゃあ判らない。とか、思っていると彼女たちのほうからこっちに来た。
「ありゃあ何点っすか？久保先生。ちなみに俺の視点だと右から６２、７１、６７、９２、７６とみたが。一人点数高いよな、絶対」
「俺やったらなぁ、右から６６、６３、６２、９７、８０やな。左から２番目の娘、バス子ちゃん並に可愛いぞ。おい」
またまた、失礼な採点をこいつらは…。お前らは自分の顔でも採点してやがれ。
「おい、セーダイ。あの班の娘紹介して。特に左２人」
こそこそっと、川口が耳元で俺にささやく。
「・・・。まぁ、知ってたら。な」

まぁ、誰か判っても知らないっていうけど。
「あの、隣。いいですか？」
入り口で聞こえた甲高い声が耳元で聞こえる。うぎゃー、女性への免疫がゼロに等しい俺には酷だ！マジで発情しちまう。顔なんて直視できねぇ！
「あ、あぁ。別にいいっすよ。どぞどぞ」
「すみません、ホントに」
「いや、いいんじゃないすか？ここが貴方達の班の座る場所なんでしょ？」
ご丁寧に頭を何度も下げる彼女にこっちも釣られて敬語になってしまう。貴方、なんて普段言わねぇよ、絶対さ。
「まぁ、そうですね。…ん？」
彼女が苦笑して、座ろうとした瞬間、俺と目が合って彼女が疑問符を頭に浮かべる。
「どうかしましたか？」
「いや、ちょっと…ん～？」
彼女の顔が首をかしげながら接近、心臓はバックバックなって、音漏れしてるんじゃないかと思うくらいやばい。だってさ、今始めて彼女直視したけど、めちゃくちゃ可愛いよ。ショートで、たれ目がちで大きな瞳。小さくて、それでいて今にでもむしゃぶりつきたくなるようなその唇。
そう思って眺めていると、途端。彼女はくるりと班員のほうへ反転する。ショート気味の髪が顔にパサパサっとかかる。一瞬だけ来る女性的な髪の匂い。
「あぁ！やっぱり！ねぇねぇ、おっちゃん。この人ってさ、セーちゃんだよね！」
「おっちゃん言うなっていってるだろ。何かおっさんみたいだろうが。つーか、いや、どうだろうか。言われてみればそうでもないけどさ…」
おっちゃんと呼ばれた女性は、首をかしげる。俺をセーちゃんなん

て呼ぶ人間、そうはいないはずだが…。
「おい、知り合いか？この女の子たち」
「微妙だな。まぁ、名前きけば思い出すかも…」
こっちもこっちで、結構ビビってます。まぁ、こいつらが口そろえて９０オーバーさせた可愛い子と俺が知り合いということになれば、間接的に自分たちも彼女と仲良しになれるかも、と踏んでいるのだろうが。
「ねぇ、あんたさ、田中聖大君でしょ」
「あぁ、そうだけど？」
この声、微妙に声変わりしてるけど聞き覚えがある。ちょっと低めで、偉そうな声。えーと、誰だっけ、確か…。
「てめぇ！魔女か！？」
俺は大声を上げる。彼女は間違いなく岡部（おかべ）　恭子（きょうこ）。この体中の細胞が拒絶するこの感じは間違いない。つーか、おっちゃんなんてあだ名はこいつ以外にいないだろうと思う。
「良く判ったなぁ、田中ぁ。小坊ぶりか？」
バシンバシン
俺の頬を2回ビンタする。いや、久しぶりの再会でビンタするか？普通。だから俺の体中が拒絶するんだ。こいつと目があって攻撃されなかったことなど一度もない。俺が岡部を魔女と呼ぶ所以はそこにある。
「ちょっ、止めなよ。おっちゃん、セーちゃんと久しぶりの再会なんだから…」
「バッカだなぁ、藤っ子は。久しぶりだからビンタすんの。楽しいよ、やってみたら？」
えーと、岡部が何やかんやと恐ろしいことを言っているのはシカトするとして…。
藤っ子？何か出てきそうだな…、データ照合中…。ショート気味な女子の知り合い…。記憶にある中で８件。その中でたれ目の知り合い…。記憶にある中で３件。

さらに、あだ名が藤っ子…。記憶にある中で1件。照合終了。検索結果、本名『藤本（ふじもと）　優（ゆう）』幼稚園のころからの知り合いで、俗に言う俺の幼馴染。夢に出た少女。小学校卒業時点で叶わぬものと半分諦めていた俺の初恋の人。

「あ！藤っ子ってお前…。もしかして、ゆっちゃん？」

指を差して、岡部としゃべっているショート気味の女の子に問いかける。

「ご名答。もしかしないでも藤本　優っすよ。大きくなりすぎて誰か判らなかった？」

「いや、むしろ小さくなったような…。つーか、お前元々大きいだろうが」

失礼な

その言葉とともに俺の脛にやくざキックが入る。

「そういうときはお世辞でも可愛くなったね、とか言うべきだと思いますっ！」

…相手がそんなに可愛くなってなかったら、それ系の言葉をお世辞で言ってやったけど、言ったらお世辞に聞こえないんだよ。お前の場合は。まったく、相変わらず人の心を読めん奴だ。

「と、メシ食わんのか？自分ら」

「あぁっ！てめぇ、人のハンバーグをっ！」

旧友達との再会を楽しんでいたら、俺の皿から面白いようにメインディッシュが消えていた。残っているのはご飯と…キャベツが約5人前ほど。

俺は牛か？お前ら。そう問いかけたくなったが、今は機嫌がいいので許してやろう。明日の晩飯は覚悟しろよ、クソッタレどもめ。

・

・

・

午後8時半過ぎ、407号室。つまり、俺たちの班の部屋にて…。

「だあーっ！また俺が負けか！」

「あっはっは、久保君弱すぎ～。はい、でこピン一発ずつね～」
…。何でこんなことになってるんだ？俺達の部屋に部外者が５名ほど…。
確かにウノは大勢でやったほうが楽しいとか言うけど、コレは多すぎないか？
「どしたの～？暗いよ、セーちゃん」
「ん、気のせいだ。気にするな…」
「おらおら、元気が足りんぞ！元気が！」
岡部が片足を机にドンと乗せて、こぶしを作り大声を上げる。
「お前は、脳が足りん」
「なんだってぇ？」
ボソッと言ったはずなのに…。地獄耳かこいつ。
「誰が地獄耳だってぇ？田中」
前言撤回。地獄耳ではなく、読心術の使い手だった。やっぱり魔女なんじゃないのか？こいつ。
・
・
・
「んじゃね～。また明日～」
３０分後、彼女達はやっとでこの部屋を後にする。
「なぁなぁ、優ちゃんって子さ、可愛くね？」
彼女らが去った後、川口が皆に同意を求める。
「あぁ、確かにかわえぇな。でも、俺の趣味じゃないわ。俺は…そやな、今日見た中じゃバス子ちゃんが一番かわえぇと思う」
女好きの久保が珍しく趣味じゃないという。こいつに趣味なんてあったのか。顔が良ければ全て良しかと思っていた。
「確かに。一番はバス子ちゃんだけどな。でも、ああいうのもありかな～って」
川口が同意する。
「俺は岡部さんのほうがイイと思うけどな～」

それは止めておけ。手に負えねぇよ。と、言う意味で俺は無言でポンッと手を松永の肩に乗せ首を振る。
「んで、自分、どうなんや？」
皆の視線が一気に俺に集まる。いや、止めろ。そんな目で俺を見るな。
「…。ゆっちゃ…藤本がイイと思う」
「セーダイ、なんや！今の『ゆっちゃ』って！」
しまった、ついどもってしまった。久保の顔が何かすごく楽しそうだ。
「い、いや、何でもねぇよ。あぁ、何でも」
「嘘付け、最初藤本さんのことを『ゆっちゃん』って言ったろうが」
松永がニヤニヤして横槍を入れる。
「ゆっちゃんかぁ～。もう、アレやな。幼馴染設定でしかもお互いあだ名呼びか。完っ全に藤本さんに萌え～やな」
誰か、この地獄から助けて…。
そんな俺の気持ちとは裏腹に１１時の消灯時間を過ぎてもこの会話は続いた。

第４話～宿敵魔女と、初恋幼馴染とダブルで再見～（後書き）

如何でしたか？一応、ここからが本題（？）になってくるわけですが…。

次回『第五話～【人を蹴るときは】追憶・大切なモノとの出会いは唐突に【場所を確かめてから】～』も貴方様の時間の都合の許す限り宜しくお願い致します…。

第5話～【人を蹴るときは】大切なモノとの出会いは唐突に【場所を確かめてか

えーと、前回の次回予告で嘘つきました。サブタイトルの文字数が足りないというミスを…。申し訳ありません。
今回は唐突に夢による過去話です。それでは、お楽しみいただけたら幸いです。

・・・

この薄ぼんやりとした暗さ、夢だろうな。俺の直感がそう告げる。でも、リアルにアノ頃を辿っている。夢を見ているというより、俺自身の過去ログ・アーカイヴ的なものをを見ている感じがする。大きい。何もかもが。いや、違う。俺が小さい。手も今みたいに大きくなければ、筋肉もほとんどない。夢のほうがいつもの俺より視点が低い。つまり、コレは俺が過去を昔の俺を通してみているのか。懐かしいな、この扉。扉を開けようと手をかけた瞬間、少女たちの話し声がする。コッソリとドアを開け、中をのぞき見てみる。放課後らしく、幸いにも周りに人は少ない。と、いうか、いない。しゃべり声の中から、聞き覚えのあるワードが入ってきた。

「ねぇ、藤っ子は何のクラブに入るの～？」

アレは、岡部か。この頃から人の悪そうな顔してやがる。今入ったら何かされるだろうな。私たちは重要な話してんの。田中はどっかいってろ。とか言われて攻撃されて追い出される俺が容易に想像できる。

「うぅ～ん、やっぱりバスケットクラブかな？」

「あはぁ、藤っ子ぁ背ぇ高いもんね」

「あはは、まぁ、それだけじゃないんだけど…」

藤っ子、すなわち藤本は頬を照れくさそうに数回掻きつつ、岡部の言葉を少し否定する。

「ん？どうしたの？なんか他にも理由が？好きな人がバスケクラブにいるとか？」

ドキッとした。もし、岡部の問いに藤本がＹＥＳと答えたら、俺の初恋はこんな簡単に終わってしまう。当時の俺はまだ、何もクラブ

に入っておらず、ただボーッと家でゲームしたりして過ごしていただけだったから。
開けろ、ドアを。俺は小さい俺に指令する。いやだ、この先は聞きたくない。ドアを開けてうやむやにしてしまえ。お願いだから、開けてくれ、俺。
でも、俺の願いは叶わなかった。小さい俺がドアを開けるより早く、彼女は答えた。
「うん。そ、そゆことかな…」
なんとなく、放課後に自分の教室をのぞき見ただけで俺の初恋は終わってしまった。胸の奥から哀しみがこみ上げてくる。つつーっと頬を伝う熱い雫。口からは自然と嗚咽が漏れる。
と、そこへ追い討ち。
「私よりいっこ上のね、上坂って言う人なんだけど…」
もう、それ以上聞きたくなかった。彼女の言葉によって、俺の初恋が破壊されていくのを。そう思い、泣きっ面をがしがし不器用に拭い、鼻を真っ赤にしながら俺は走った。
玄関について、気づく。そういえば、ランドセルを教室に置いたままだった。どうやってとりに行こうか…。
そう思いながら、教室にとりあえず立ち寄る。今は泣き止んでいるし、岡部に突っ込まれても気のせいだといえば押し通せないこともない。
教室の前に立つ。彼女たちはまだアノ話をしていた。
「んじゃさ、今クラブやってるだろうし、見学に行く？」
「いや、いいよぉ。見学なんて、バスケクラブの人たちに邪魔だろうし…」
そんな話をしながら彼女らはドア越しに俺のほうへと向かってくる。
ガラッ
彼女たちはランドセルを背負ってそのまま体育館へといってしまった。くるりと身を反転して壁に体をはりつけた俺には目もくれず。
好都合だ。勝手に教室は空いてくれた。ランドセルを背負って、俺

はさっさと帰るか、と思ったけど…。少しに気になることがある。
足は自然と体育館へと向かっていった。別に彼女たちの跡を尾行ているわけじゃない。ただ、気になることがあるから。そう、上坂ってのはどんな奴なのかこの目で確かめておきたかった。
顔も知らない人間に負けるのはごめんだ、と思ったから。
体育館に入ると、そこは異空間だった。今までの生温い生活観から一転。ここは戦場だ。
エイ、オウ、エイ、オウの掛け声が体育館中にこだまし、クラブ生たちは汗びっしょりになりながら、サーキットトレーニングを繰り返し繰り返し行っている。
「おらぁ！そんな体力で試合もつと思ってんのか！あと5本追加！」
サングラスをかけたコーチには見覚えがあった。俺のクラスの担任の吉田だ。普段の柔和な表情からは想像もつかないほどの怒声に、俺はビビって一歩退いた。と、その瞬間
どっ、と背中に衝撃。と、同時に音声。
「あれぇ？田中じゃん。こんなとこで何やってんの？」
岡部が俺に気づいた、今のはその挨拶代わりか。多分。やっぱりこいつはどんな場所、どんな状況でもこいつだ。
「セ、セーダイ君もバスケの練習見にきたの？」
「ん、まぁ…な。ゆ…藤本もか？それとも魔女の付き添い？」
そういえば、彼女を異性として見始めた頃にはもう、恥ずかしくてあだ名では呼べなかったんだ。
彼女も流石に小4にもなって、そんなことは恥ずかしいのだろう。無理やりにでも直そうとしていたのがわかった。
でも再会してからは、普通にお互い小さい頃のあだ名で呼び合った。お互い小さい頃のくせが結局直ってないってことかな。
「うん、ちょっとね。入部しようかな～なんて思っちゃったりするんだけど…」
この頃、俺たちは繋がりなんかほとんどなかった。ただ、幼稚園の頃からの幼馴染で、お互いの親が仲良かったことくらいしか。話す

機会もほとんどなかったし。
「そっか、実は俺もなんだ」
俺は自分でも予想していないことを口にした。
「無理無理、根性なしの田中にはこーゆうのは向いてないって…」
岡部が正論を言う。確かに。俺も一週間で辞める自信がある。
「そんなことないよ、やってみなくちゃわからｎ亜ｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@」
藤本の言葉の途中で画面は砂嵐へと変わっていく。彼女の言葉と入れ違いに、別の声が聞こえる。俺を現世へと戻す低い声。
「ほら見ろセーダイ！素晴らしい朝だぞ！雪が綺麗だ！女も綺麗だ！だが、俺らの精神は非常に醜い！さぁ、起きろ！肉欲獣・セーダイ！」
そんなわけのわからん呪文を間近で唱えられ、その呪文の詠唱者に何故か無性に腹が立った俺はそいつの、川口の腹を蹴った。はずだったが、感触が違う。
川口はその場に崩れ落ちたから、はずしたわけじゃなさそうだが…。
「朝っぱらから元気だな、セーダイ。君に教えることは何もない。さぁ、朝飯へと俺も連れて行くがいい。君の一撃は綺麗に漢のロマンに直撃したぞ」
あぁ、なるほど。そういうことか。
「まぁ、つまり。久保も松永も、もう、とっくに宴会場に行ってしまったぞ。ということだ」
股間を押さえ、芋虫みたいな動きをしながら、彼はそう伝える。
「そっか。んじゃな。俺、朝飯食ってくるわ。川口は芋虫ごっこやっててな」
けらけらと笑いながら俺は川口に手を振る。川口は心底あせった表情で、待てよ待てよと俺によりすがってきたので、彼をおんぶして宴会場に行くことにした。
なんか、最初からアブノーマルなせいでどことなく変な予感を感じる2日目の始まり。

第5話～【人を蹴るときは】大切なモノとの出会いは唐突に【場所を確かめてか

如何でしたか？
と、いいますか、前書き・後書きをいちいち書くというのは「不要じゃねぇか？」と、自分でも思います。が、何となく、書いておかないとという…。次回『第6話～ノンストップ電波スキーヤー・小柳美穂。登場～』も、貴方様の時間の都合の許す限り、宜しくお願いします。…また文字数オーバーしてたらどうしよw

第6話～ノンストップ電波スキーヤー・小柳美穂。登場～（前書き）

いい加減、この題名嫌になってきましたw
いや、なんかしっくりこないというか…。大体元々考えていた題名と同名の小説があったからかなりビビッて必死こいて変えたんですよね…。
どうでもいいことです。それでは、今回も貴方様のいい暇つぶしになるように…。

第6話～ノンストップ電波スキーヤー・小柳美穂。登場～

「「ごちそーさまでしたっ！」」
学校混合、男女混合、総勢約８００名が一斉に同じ言葉を言う。この古い旅館は少し揺れたような気がする…。
ガタガタッ、皆、バラバラのタイミングで立ち上がり、それぞれ食後の私語を楽しむ。
「おら！上之保学園生徒！喋ってないでさっさとスキー靴とってこい！」
俺たちの学年主任が声を上げ、俺たちは別に反論もなく素直にその命令に従う。
・
・
・
８時５０分。ホテル・希望閣前にて。
学年主任の桐坂は集合した俺たちをを見回す。
「よ～し、みんな集まったな」
「それじゃあ、説明します。まず、Ａ組の行動班…」
説明が長い。手元の時計でかれこれ４０分話してるぞ。あぁ、もう、大概面倒くさいな。
「では、私の後をついてきてください」
ふぅ、やっとで終わったか。
と、安心した俺が馬鹿だった。スキー場についたら、ついたでスキー学校の開校式とかをして、更に２０分消費。何だってこんなに一人喋りが好きなんだ、こいつらは。
・
・
・
スキーを始めて3時間後…。事件は起こった。

「あぁ、ボーゲンとかな～。なんかオカマみたいだよな～、この内股具合」
松永が気だるそうに久保に話しかけてくる。松永はスキー経験者らしく、もう、直滑降やらなにやらも楽勝だって話だ。
「まぁ、仕方ないんやないんか？したことない奴んほうが多いんやし」
久保もスキーしたことがないっていってたから、正直話しかけられるとバランス崩しそうで困ってるっぽいけど、シカトするわけにも行かないから相手をしてやるってとこか。
「ぬあっ！」
ついつい奇声。もうこの3時間で奇声は言い慣れた。
俺は基本的にスポーツは何でも並一通り出来るはずなのに、スキーは苦手のようで、滑ってもいないのにこけたりする。
「くそ～、誰だよ。スキーなんて考えた奴」
パンパンと雪を払いながら、愚痴をこぼす。俺にこんな弱点があったとは…。
「はうぁっ！」
スキー板を斜面と垂直にしていて普通はこけるはずはないのだが、俺は普通じゃないんでこける。
「ぐぁ、ケツ打った。今の。痛くはないんだけど、めっちゃ恥ずかしい～」
俺は苦笑して、そんなことをいいながら起き上がろうとしていると…上から声が聞こえた。
「ちょっと、何やってんのー！？どいてどいてー！」
その声は、俺たちに向けられた、というか俺に向けられたものだということを理解したのは俺が雪面に尻餅をついたまま、みんなが俺の視界からフレームアウトしていったときだった…つまり、完全に手遅れ。
グシャッ
ちょっと耳元で、雪に何かが埋もれた音がする。

何があったかちょっと理解できないので、整理してみることにする。
俺が尻餅をついて、その後に上から声がして…んで、ごきりって首の音を聞いたと同時に久保たちは視界から消滅。つまり、俺は上から降ってきた何かに押し流されてここにいると考えるのが妥当か？
「お～い、セーダイ～。大丈夫か～？」
いまいち状況を把握できていない俺たちの班（インストラクターさん含む）はとりあえず俺が撃沈しているところまで下る。
「いたたたた…」
そこには、一般客がまぎれていた。あぁ、こいつが俺をここまで引きずったのか…。
「まったく、ニーちゃんのせいでボクがこけてしまったじゃないか！どうしてくれるんだ、ニーちゃん！」
えーと、この一般客は俺に怒っているのだろうか。ゴーグルをしていて、視線がわからない。
この声で唯一わかったのは、この一般客は女性…というより女の子だということ。
「って、おい。ニーちゃん。どうしたの？お～い」
パフンパフン
手袋をはめた手で俺の頬をペチペチと叩く。が、俺からの反応はない。もう、反応する気力も残ってねぇよ。つーか、意識がほとんどない。もうすぐ…飛ぶ。
「「・・・」」
皆、一瞬の沈黙。その沈黙を破ったのは、一般客の彼女の笑い声。
「えへ☆」
久保たちにわかるように、顔ごとこっちを向き、舌を出す。やっちゃった、ってな表情で。この顔で久保たちの硬直は解けた。
「ちょっと！セーダイ！死ぬな！自分、まだ彼女も居らん童貞やろが！そんなままで死んでえぇんか！」
「死ぬな！お前が死んだらウチのフォワードは誰がやるんだ！」
「お前が死んだら、俺たちの試合のときに来る女性観客の数が若干

数減ってしまう、さぁ、起きるんだ！」
俺の上に馬乗りになった女の子を強引にどかし、ゆさゆさと俺を揺さぶる。はーい、僕様ちゃんは、ただいま反応できない状況でーす。インストラクターさんはぽかんと口を開け、こんなの始めてっすよ。ってな顔をする。
「と、とりあえず医務室に連れて行きましょうか」
インストラクターさんは俺を担ぐと、そのまま直滑降していった。
「…。お、俺たちも行くぞ。つーか、セーダイの体重何キロやった？」
「…。確か、８３キロ」
なんか、すごい光景を見た気もするが、気にしないことにするか。
彼らは目でそう言い合った。暗黙の了解。
・
・
・
「あちゃー、完全にノビてますね。こりゃあ」
昨日はバスガイド、今日は看護師な彼女。ナース服の上に白衣を着るという、ある意味一度で二度おいしいファッションの高見さんは半死半生の俺を診断してこういう。
「んで、こいつ。大丈夫なんすか？」
「うん、大丈夫大丈夫。ちょっと気を失ってるだけ。でも、今日のスキーはちょっと無理かな」
久保の問いに彼女はにっこりと答える。この場にいた皆が一気にはぁ、と安堵のため息をつく。
「良かったぁ。怪我しちゃったらどうしようかと思ったよ」
近くで高見さんとは別の女の子の声がする。
「「「…。誰だ？」」」
久保・川口・松永の三人は口をそろえて問う。
「えーと、この人と衝突しちゃった小柳（こやなぎ）　美穂（みほ）です。え、えへ☆」
彼女は久保たちから白い目を向けられる。いや、まぁ、当然だろう。

人を撥ねておいて（ちょっとニュアンスは違うがそんなもんだろう）、謝罪なしでえへ☆なんてふざけてるとしか思えない。
そんな彼女を歩く熱血を自称、そして他称される川口が黙っていなかった。
「てめぇ！この期に及んで何が…」
ずいっと、彼女に向かって身を乗り出そうとした彼を制止する腕が一本。
「馬鹿、止めろって。か弱い女の子に手を出すのは良くないぞ」
くいっ、と川口の肩をこちら側へと引き寄せる。
「セーダイ！お前、生き返ったのか！？」
「いやいや、もともと死んだ覚えないですから。つーかな、お前。俺はどこも怪我してないんだから、そんなガナリ散らさんでもいいだろ。それに、彼女は俺の怪我を心配してついてきてくれたらしいし、悪い奴じゃないだろ」
俺はそういって、落ち着けよ。と、ポンッと手を置く。
「…。わっーたよ。ホントにどうともないんだな？」
川口は肩に置かれた手を払い、小柳と言った少女向かって舌打ちする。
「まぁ、そう怒んなよ…。んで、小柳…さんやっけか？わざわざこんなとこまで、すまんなぁ。もー帰ってもろてええで」
久保がそういって、彼女を見ると。彼女は頬を真っ赤にしていた。
「…ぃぃ…」
「んぁ？」
彼女の呟きが上手く聞こえず、久保は彼女に聞き返した。
「カッコいい！！」
はぁ？という感想しか俺たちは抱けなかった。いきなり何を言い出すんだこの娘は。
何を思ったか小柳はいきなりベットに向かって走り、ダイブする。
ちょうど俺に馬乗りになった感じ。
「ねぇ、ニーちゃんさ、名前何？何？」

「…田中聖大っすけど？どうかしましたか？」
俺は思わず言われるままに自分の名前を名乗った。
「ふぅ～ん、じゃあさ、じゃあさ、聖大！ボクとケッコンしよ！」
「へぇ…。って、はぁ？」
「「はぁあああぁっ！？」」
俺だけじゃなく、周りもこの唐突さに驚きを隠せなかった。何だ、こいつは…。いきなりそんな…。
「ねぇねぇ、いいでしょ？いいでしょ～？」
ゆさゆさとベット後と俺の体を揺する。もう一回、意識を失いたい気分になった。

第６話～ノンストップ電波スキーヤー・小柳美穂。登場～（後書き）

前書きが長ぇ！ＹＥＳ！！
如何でしたか？第６話。実際、出す必要があったのかわからないキャラクタの登場で話はどんどんあさっての方向に…。次回『第七話～今回のご注文はどの娘？～』も、貴方様の時間の都合が許す限りご贔屓に…ご贔屓にぃ！！（必死

第7話～今回のご注文はどの娘？～（前書き）

ここまでヘタレな小説に感想頂けるのはまことに嬉しい限りなのですが、返信したいんでアドレスは書いて欲しいですねぇ…。独り言だけども。

それでは、今回も貴方様の暇つぶしになりますように…。

第7話～今回のご注文はどの娘？～

「んぐ…つーか、何だったんだ、さっきの娘は…」
松永が昼食のカレーを飲み込みながら話題をさっきの娘…すなわち小柳美穂にもってくる。
「顔だけ見るとそこそこ可愛いよな。何歳くらいだろ？あ、葉っぱ入ってら…」
川口が口からカレールーまみれの葉っぱを取り出し、すかさずその話題に食いつく。
「まったくやな。いつの間にあんな可愛い子捕まえたんや、セーダイ」
「うわっ、カレー飛ばすな、馬鹿」
ピッと、カレーのついたスプーンを勢い良く俺に向ける。当然のことながら、カレーがこちらに向かって飛んでくる。
「この御時世イキナリ『結婚しよう』はないぜ。小学生でも言うかどうか際どいもんがあるで。ま、そういう意味でも可愛い子やな。ありゃ、処女やで」
最後に変な言葉をつけ、久保はけらけら笑う。人の気も知らないで、こいつは…。
「あのさ…隣、いい？」
その甲高い声の主は済まなそうに肩をすくませ、短めの髪を右手で掻き撫でる。
「藤本か…。あぁ、別にいいけど？」
俺には別段断る理由もないし、こいつらも構わないだろうと踏んで、俺なりにどうぞといってみる。
「えぇよなぁ、セーダイは。この修学旅行、始まってまだ1日半やってのに、すでに3人も可愛い娘引き連れてな～。この女たらしめが」
久保はわざと藤本に聞こえる位の声の大きさで言う。これで藤本が

俺のことをどう思っているかを見極めることができる、と、言う表情でニヤニヤしている。
「・・・」
彼女は黙ってしまった。顔を真っ赤っ赤にして。あぁ、目は口ほどにものを言うというか、顔は口以上に物を言うというか…。でも、正直、かなり嬉しい。少なくとも、誤解されても仕方ないくらいの好意は持っているということなのだから。
「久保君、藤っ子あんまりいじめないでね～。こいつ、切れると暴走するからさ」
久保の横から顔をにゅっと出す。そいつは魔女こと、岡部だ。
「へぇ～、そいつぁ逆に見てみたいわ。どんなんなるん？」
「うぅ～ん、ちっちゃい子のヒステリックみたいな感じかな？」
久保と岡部が会話をしていると、藤本の顔は見る見るうちに赤みを増していく。彼女は風船みたいに頬を膨らませ
「ふにゅ…ふにゅ…ぶみゃー！」
破裂した。いや、これはこれで可愛いんだけど、何というか…幼稚だ。
「ふみっふみっぶみー！」
ビュンビュンビュン、近くにあった爪楊枝をご丁寧に一本一本俺たちにブン投げる。
「いや、俺たち関係ねぇし！魔女と久保だろ、原因は！俺たち巻き込むなって、おい！止めろって！」
「うにゅにゅー！」
駄目だ、聞いちゃいない。
「ね、こんなになるんだよ。怒らせないほうがいいでしょ？」
「コレはコレで魅力はあるんやけど、確かに怒らせんほうが吉かも…」
この期に及んで久保と岡部はひそひそ話を続ける。俺が止めるしかないのか…駄目モトで。
「おい、止めろって言ってんのが聞こえんのか？藤本」

静かに、それでいて、確実に相手に届くように俺は彼女の目を見て静止を求める。精一杯威厳を込めて。
「…ふみ？」
彼女は涙の溜まった目を俺のほうに向ける。
「爪楊枝なんか投げて、怪我したらどうするんだよ。落ち着け、俺たちが悪かったから、な？」
ぽんぽん、と彼女の肩を二回叩く。すると、彼女はさっきまでの行動が嘘のように静まった。
「おぉ、流石は上之保学園が生んだ女たらし。うまく取り押さえたな」
松永が茶々を入れる。松永の隣で川口がまた噴火するから今はそういう冗談は止めとけよ、と彼を口止めする。
「ごめん！藤っ子、私が悪かった。この通り、な？」
自分の顔の前で両手を合わせてごめんなさい、とお辞儀する。
「むむ～、今回は許すよ。久保君とかもいるし…。でもね、次ぃ茶化したら許さないからね？」
「突っ込んでくださいって表情したあんたが原因でしょう」
「何ぃ？何か言ったぁ？」
「あぁ、いやいやいや。なんでもないなんでもない」
岡部がすごい勢いで顔を横に振る。今は怒らせないほうが吉と踏んだか。に、しても、こんなに強い立場の藤本を見るのは初めてだ。
・
・
・
昼食を終え、集合時間になったので俺たちはスキー場に戻る。
「お前、大丈夫なんか？」
久保が、柄にもなく俺を気遣って優しく声をかける。まぁ、あそこまで派手に轢かれたら誰だって俺に優しくしてくれるかな？
「あぁ、大丈夫大丈夫。気にするなよ。この貴重な女性とのふれあいの時間を一秒たりとも無駄にしたくないんでな…」

「目ぇめっちゃギラギラしてるな。セーダイ」
松永がやばいものを見るような目つきで俺を直視する。
「…。セーダイ、我がの命が惜しかったら誰かの影に顔だけでも隠してろ」
川口が何かに気づき、ひっそりとそう呟く。
「あぁ？何言ってんだおま…」
そこまで言って俺は口をふさぐ。なるほどね、そういうことか。確かに、不味いな。すすすっと、この中で一番大きい久保の後ろに隠れる。
彼女はこっちを見た途端、走りよってくる。いかん、バレたか…。
「あ！ねぇねぇ、聖大どこ？」
いや、バレてはいないようだ。良かった良かった。この言葉に川口が対応する。
「さ、さぁ？医務室にでもいるんじゃないのk…」
「ん？ここに居るやん。ほら、セーダイ可愛いお客さんやぞ」
川口が折角嘘をついてまで接触を避けようとしてくれたのに…。久保、お前という奴は…。
「あ、いたいた！ねぇねぇ聖大～、一緒に滑ろー？ねぇ、良いでしょ？」
彼女はくいっ、くいっと俺のスキーウェアをを引っ張る。
「いや、スキー講習があるから駄目だ。ま、また今度な…」
こういうことはしっかりと断ることが基本だ。相手がいくら可愛くても…。
「えぇ～？今度っていつ～？ツマンナイつまんないぃ～！」
彼女はその答えに地団太を踏む。ホント、こいつ何歳だろうか…。
「なぁ、美穂ちゃんって何歳なん？」
久保が中腰に構え、彼女と同じ目線で聞き出す。あぁ、そういえば小さい子には同じ目線で話すと良いって何かで言ってたっけ…。
「え？えーとね…いち、にぃ、さん…」
彼女はこともあろうことか指折りで数え始めた。幼稚園児か？こい

つは。
「ボクはね…。15歳なのだっ！ぶいぶいっ！」
失礼かもしれないが、とてもそうは見えない。バスに小学生料金で乗ってもばれそうにない。
「ってかさ、聖大～。一緒に滑ろうよぉ～」
あぁ、もう、言い出したら聞かない駄々っ子め。そういうのが好きな人にはタマラン存在だろうな、こういうのは。
「俺はスキー講習に参加するの！」
俺は誘惑に負けそうな自分に喝を入れる意味も込めて、大声で断る。
「ってか、そうそう…お前、今日はスキー講習受けれんぞ？」
「え？何で？」
「いや、ほら、ゼッケンを医務室のバス子ちゃんに取られとるやろ？ゼッケンなかったら上之保の生徒ってわからんやん。スキーウェアはレンタルもんやし」
…何か、不吉な予感がする。
「つーわけや、思う存分美穂ちゃんと楽しんで来い。な？」
うっそーん。
「わーい、ありがとー！久保」
小柳は久保ににっこり微笑みかけると、それじゃあ行こーよ。と、俺の袖を引っ張る。
もう、何ていうかね…。今日一日はこの娘のお守り役みたいなもんか…。
今日はとことん厄日かもな…。

第7話～今回のご注文はどの娘？～（後書き）

如何でしたでしょうか？まぁ、相も変わらずアレな出来といえばそうなのですが…。稚拙なんだよなぁ…。

次回『第８話～電波少女・小柳美穂。爆裂～』も、貴方様の時間の都合の許す限り…読んで頂けたら嬉しいです。

第８話～電波少女・小柳美穂。爆裂～（前書き）

何でか小説を書いているときにＴＭＲがコンポから流れてたりします。

滅茶苦茶どうでもいいことですが…。それでは、今回も皆さんの暇つぶしになりますよう…。

第8話～電波少女・小柳美穂。爆裂～

「にゃっ、ふふっふふ～ん♪」
リフトで俺の隣にいる彼女は足をブランブランさせてリフトを揺らす。
「おいっ、ちょっ、落ちるかもしれないから止めとけって」
「ありゃ？聖大って意外とビビリ？」
彼女は見当違いな言葉を俺にぶつける。確かに、心臓はでかいほうじゃないが…。
「まぁ、んなこたぁいいんだ。それよりさ、小柳はスキー上手いのか？」
「ん～、まぁ、苦手じゃないけど…。上手くもないかな？つーかさ、美穂って呼んでよ～。恋人同士なんだからさっ♪」
恋人同士って誰が決めた、誰が。俺は心の中でそう口にした。でも、下手じゃないなら何で俺に突っ込んだんだろ…。ま、ただの交通事故みたいなもんか。
「そういえば、学校はどうしたんだ？今日平日だぞ？」
「え？あ、う…そ、創立記念日だよ？いいじゃん、別に」
「まぁ、確かにどうでもいいことかもな。でも、もしサボりだとしたらさ…」
「サボりなんかじゃない！」
小柳は怒声で俺の言葉に即座に反論した。いつものニコニコした可愛らしい笑みはそこにはない。
「サボりなんかじゃないもん…。サボってなんか、ないんだから…」
怒ったかと思えば、急に泣きそうな顔になる。そんなに言ったらいけないことだったのかな…。とりあえず、謝っておくか。
「…。ごめん、変な勘ぐりしすぎたな」
「いいよ、別に。さっき、答えるのにどもったボクが悪いんだから…」

小柳はぷいっとそっぽを向いてしまった。少し罪悪感に駆られる。
沈黙が少し続いたかと思ったら…
「ボクをいやな気分にさせた分、償ってもらうからね！」
イキナリ小柳が大きな声を張り上げる。
「覚悟しておいてね！もう、色んなことしてやるんだから！」
ビシッ！小柳は指を一本俺のほうへ向け、へへん、と笑ってみせる。
これは、許してもらえたのだろうか…。
「あ、ほら。もう、上りきったみたいだよ？聖大、降りよ♪」
「あ、あぁ…そうだな」
イキナリの会心の笑みに俺は少し戸惑う。
シャーッ、小柳は線を引くようにリフトから降りる。んで、俺はというと…。
ガツンッ！出遅れてリフトで頭をぶつける。小柳を含む近くにいる人たち皆がくすくすと笑う。すごく恥ずかしい。リフトは止めてしまうし…。
「ほぉら、聖大は鈍いんだから～。んじゃ、ボクがスキー教えてあげるね♪」
「あぁ、頼む」
俺専属のインストラクター、小柳美穂は確かに上手くもなく下手でもない、まさに普通の腕前だった。それでも教え方は比較的上手かったのか、俺は2時間ほどで形になってきた。
「そうそう、そんな感じそんな感じ～♪」
と、上達を肌で感じながら気持ちよく滑っていると…。
気がつけば周りの客が少なくなっていた。マズイ、もし、班員とは別に滑っていたことがばれたら…素で殺されるかもしれない。
そう思い、一気に下山する。
「なぁ、小柳。俺、旅館に戻らないといけないから。ここいらでさよならだ」
「にゅ？あ、ま、いっか。わかったよ。それじゃあね」
少し複雑そうな顔をして、彼女は別れの言葉を口にする。

「あ、あとさ…」
「ん？なぁに？」
少し、恥ずかしくて言うかどうか戸惑ったが、言うことにした。
「今日は…その、ありがとな」
自分でも顔が赤くなったのが分かる。苦し紛れの微笑とともに。
「うん、こちらこそ。それじゃね♪」
・
・
・
旅館に戻ると、俺の班の班員3名と藤本たちが旅館の前に立っていた。
「お前なぁ、時間くらいはちゃんと守れよな…」
松永が呆れたように頭をかきながら俺に言う。
「だな。岡部さんが声色変えて代役してくれなかったら俺ら全員あの世行きだったぞ」
川口が松永に賛同する。何か、とんでもない単語が聞こえた気もするが、あえて突っ込まないでおこう。
「ま、早よ着替えて来いや。部屋で待っとっから」
「誰か一人お供させたほうが良いと思うぞ。見張りを」
川口の提案、確かに。その通りだ。もし、着替えてる最中に見つかりでもしたら今までの苦労が台無しどころか、事態の悪化を招く結果になりかねない。
「それじゃ、私が行くよ」
藤本が率先して、一歩前に出る。
「他校生だったらそっちの先生たちに見つかっても何も言われないでしょ？」
「ん、ごもっとも。それじゃ、優ちゃん、お供で行って来て。皆、俺らん部屋に集まってっから優ちゃんも来いよな～」
「う～ん、わかったよ～」
藤本は久保たちがロビーに消えていくのを見送って

「…それじゃ、行こっか」
そう口にする。まぁ、当然異論はないワケで、そうだな、と相槌を打って倉庫へ向かう。
・
・
・
それからは何事もなかったように、時間が過ぎ、風呂から上がって部屋に戻ってきたときにあることが起きた。
ガチャリ
ジュース片手にだべりながらドアのノブを回し、部屋に入る。ふと、前を見ると、信じられない光景があった。
「どうも、お帰りなさいませ」
正座をした小さい子が俺たちが入ってくる途端に頭を下げる。
部屋を間違えたかと思い、俺たちは一斉に部屋に書いてある名前を見る。そこには
『久保貴洋・川口明彦・松永大輔・田中聖大』
しっかり4人の名前が書かれていた。
小さい子は顔を上げ、そこで始めて誰か判った。小柳だ、小柳美穂。
「ご飯になさいます？お風呂になさいます？」
「いや、両方とも済んだから。ってか、ここで何してんだ、お前」
冷静に突っ込みを入れる、が、当の本人は聞いちゃいないようだ。
「それとも、ボクになさいます？」
がし
冷静に小柳の服の襟の辺りをつかみ、外に放り出す。
「ちなみに、ボクのお勧めは3番目…。って、ちょっと、聖大！何外に出してんの？ねぇ、ねぇってば！」
がちゃり
彼女が何か言ってる最中に、内側からドアの鍵を閉める。
「スキーしてる最中もあんな感じだったのか？」
川口が心配そうな目で、俺を見る。俺は無言でこくりと頷く。

「そいつは大変やったな。でも、ま、かわえぇんと違うか？ああいうんも」
「ありゃ、恋愛対象の可愛いって言うより妹とかの可愛いだわな」
俺が久保の感想に付け加えると…
「妹だって恋愛対象だぞ！」
松永が力説する。俺たちの時が少し止まった。
「・・・。あぁ、そうか」
川口が比較的冷静に対処しようと言葉を探している隣で
「シスコンやー！松永シスコンやってん！」
「ちょっと、中で騒いでないでボクも入れてよー！」
内側は内側でギャーギャー、外側は外側でギャーギャー、収拾もつかないのでとりあえず、小柳を部屋の中に入れる。
「それで、家に帰らなくて良いのか？」
「ん？何言ってるの？ここ、ボクの家だよ？ボク率いる小柳家の家、且つ旅館。だから、ボクがここにいても何の不思議もないの。わかった？に、しても水臭いなぁ～、ここに泊まってるならそう言ってくれればよかったのに。それでさ、聖大」
「あ、あぁ、わかった。それで、何だ？」
正直心臓が飛び出るくらい驚いているが、あえて平静を保つように努める。
「一緒に寝よ♪」
「・・・」
ドサッ
「おい、セーダイ死ぬなって！」
このとき、俺は本日何度目かの臨死体験をした。

第8話～電波少女・小柳美穂。爆裂～（後書き）

如何でしたか？それでは次回『第9話～遠い遠い夢の中で～』も、貴方様の時間の都合の許す限り、お願いいたします。と、いいますか、前書きいらないなぁ…w

第9話～遠い遠い夢の中で～（前書き）

毎回読者への警告のような、何だか微妙な感じですが、今回はお知らせです。
本日から1日1話で更新しようかと思います。決してネタが尽きたわけでなくwそれでは、今回も暇つぶしになりますよう…。

第9話～遠い遠い夢の中で～

・
・　・
・

昔よく聞いた怒声でこの夢の世界へと引き寄せられる。どうやら、ランニング中のようだ。

「遅いぞぉ！藤本、田中ぁ！ピッチ上げろぉ！」

「「は、はい！」」

俺たちがバスケ部に入部して1ヶ月がたった。俺は、不思議とまだ続けていた。自分でも正直こんなに持つとは思っても見なかった。

「よぉーし、じゃあ、次は…腕立て腹筋背筋スクワット２０回を５セット。いくぞ、まず腕立て伏せから！いぃ～ち！」

「はぁっはぁっ…。準備、運動ってどころじゃ、ない、よな、コレ…。ボディッ。ビ、ビルダーでも…つく…っはぁっ…作る気か？吉田、先生は」

「セ、セーちゃん…しゃ、喋ってたら…よ、余計…疲れ、るよ」

「た、確か、に…」

お互い息を荒げながら途切れ途切れの単語を口にする。

「よぉし、それじゃあ１０分休憩だ。休憩後は、新規入部組は壁に寄って、基礎練習。その他は試合形式だ」

顧問・吉田の一声で皆一斉に座り込む。

ガコン、パシュッ、ガコガコッ、ダン・ダン・ダン・ダン…

ボールが次々とゴールに吸い込まれていく。休憩時間にもかかわらずレギュラー組がシュート練習をはじめる。

「おい、セーダイ」

休んでいると後ろから声が聞こえる。

「あ、先輩。何すか？」

背後を振り向き、答える。そこにはここ一ヶ月で見慣れた先輩・上

坂が立っていた。
「先輩は止めろって言ったろ、あと、敬語も」
「あ、そうでしたね。それで、用件は？」
「そうそう、お前さ、やるからにはレギュラーとりたいだろ？」
「はぁ、まぁ、それはそうですが…」
俺はなんとも歯切れの悪い返事をする。もともと入部したのだって藤本が強引に入れたから（藤本の近くにいたいという本心もあったが）であって、そんなバスケに対する情熱があまりない人間がレギュラーとるって言うのもなんかおかしいから。
しかし、先輩はそんな歯切れの悪さなんて気にしない。
「それじゃあ、すぐ上手くなるいい方法教えてやる」
先輩はビシッと指を一本立てると、それを俺の鼻に押し当てる。
「シュート練習だ。今、疲れ果てて皆寝転んでるときがチャンスだ。シュートはやればやった分だけ差が広がるぞ」
「え？でも、シュートでゴール使っていいのってレギュラーだけじゃないんですか？」
すっとんきょうな声を上げ、ゴール付近を指差す。
「誰がそんなこと決めた。ただ、シュート打ってるのがたまたまレギュラーしかいないだけじゃないか」
「そ、そうなんですか？」
「あぁ、そうだよ。だから、ほら、シュート教えてやっからこっち来いよ」
先輩は嬉しそうに俺の腕を引っ張り、ゴール下まで近づける。
「上坂。また、新人育成か？お前、抜かれても知らんぞ」
「うっせぇなぁ。俺は大丈夫だ。それよりお前のほうがやばいんじゃないのか？最近試合でシュート入れたの見たことないぞ」
周りからハハハッと笑いが起きる。レギュラー組は皆がライバルでありながら、和気藹々と楽しんでいるようだ。
先輩に指示されたとおり、シュート練習を始める。このときはバスケの試合に出たい、とかより早くこの集団の一員になりたい、とい

う気持ちが強かった。
・
・
・
練習が終わっての放課後、俺は藤本と帰るのが日課になっていた。
今日も、彼女が着替えて更衣室から出てくるのを待っていた。
「よう、セーダイ。また彼女待ちか？優ちゃんにフラれんなよ？じゃな」
ハハハッと笑いながら、彼らは去っていく。俺はそれを見送る。
「ごめぇん、待たせちゃったね」
「そう思うならもっと早く着替えて来いよ」
そうは思っていないが、自然と彼女を突っぱねた形になっていた。
「うぅ～。ひどいよ、セーちゃんは」
「だぁ～、お前はそうやってすぐ涙目になる。冗談じゃねぇか、冗談」
今も昔も変わらぬこの反応。そういえば、すぐ涙目になるところは今でも健在なのだろうか。
「セーちゃん」
「ん？」
藤本が元気なさげにコチラに声をかける。意味深なテンションの低い声。
「あのね、私ね…最近、私はバスケ部辞めたほうがいいのかな？って思っちゃうの」
「は？何で？」
好きな人の近くにいるために、折角バスケ部に入ったのにそれを辞めるだなんて。理解できなかった。
「私ね、好きな人がバスケ部にいるからっていう、軽い気持ちで入ったんだ」
「へぇ…」
知っていたけど、敢えてはじめて聞くような素振りをする。

「でもね、入ってみると皆真剣で…。私みたいなバスケットより男の子を追っている人はいたら駄目なような気がして…さ」
彼女はいつになく落ち込んでいた。藤本とは結構な間付き合っているが、こんな藤本を見るのは初めてだ。
「きっかけなんて…。そんなもんじゃないのか？」
「え？」
彼女は俺の一言に驚き、こっちを向く。
「いや、俺だってそうだよ。好きな子がバスケ部に入ろうとしてたから、俺も入ったんだよ。つながりが欲しくてさ…」
「へぇ…。セーちゃんにそんな人いたんだ…。意外」
彼女が驚きのまなざしで俺を見つめる。何だ？俺が恋したら悪いってのか？
「それで、誰？」
「は？」
彼女の質問の意味は分かっていたけど、質問の意図を確かめる。
「だから、セーちゃんの好きな人って誰？」
「いや、まず、お前から言うのが常識だろ」
とりあえず、その場しのぎの逃げをする。彼女が言わなければ、そこでこの話題は終わりだ。出来れば、誰とか言わないで欲しい。
「え、えぇ？あ、あのね…5年生の上坂先輩…」
言いやがった、こいつ。俺の願いに反して言いやがった。どうしよう、ドウシヨウ…。
「い、言ったよ？次はセーちゃんの番ね？」
藤本はこんな暗がりでも分かるほど赤面し、その表情を見て決心する。
「・・・お前、だよ」
俺はそっぽを向いて、照れながら、不器用に告白した。
「お前が…藤本優が、好き、なん…だよ」
俺は自分でも声がどんどん小さくなっていくのが分かった。
「・・・。本気？」

彼女は聞き返す。
「冗談言ってるほど、今の俺に余裕はない」
「…。そう、なんだ…」
彼女は顔を伏せる。顔を耳まで真っ赤にして。今まで過ごしてきた幼馴染からそんな台詞が聞けるとは思っても見なかったのだろう。
長い沈黙、気がつけば二人は藤本の家の前にまで来ていた。
「それじゃね、セーちゃん」
「あぁ、じゃあな」
彼女は家のドアノブを握る。
「あ、そうそう…」
「何？セーちゃん」
ドアノブを握ったままの状態で彼女は静止する。
「第三者の俺が言えた事じゃないけどさ…。バスケ、絶対辞めんなよ…」
この闇に消えそうな声、でも、俺は心からそう思った。彼女に辞めて欲しくない、と。
「…。考えて…おくよ」
彼女はそういうと、ドアノブを回し、家の奥へと消えていった。
空間がゆがむ…。そして、暗転。目覚めの儀式。
・
・
・
「聖大～！起きろぉ～！」
いつも俺を起こしてくれる低い声とは違って、甲高い声。この声は聞き覚えがある。最近になって聞きだした声。
パチリ
目を開けると…
「おっはよう♪」
小柳がいた。同じ布団に入っていて、顔は目と鼻の先。何だ、この状況は。

「何々？出会ったその日にはすでにベットインかお前ら？早いなぁ、最近の子は」
松永が茶々を入れ、久保と川口がそれにあわせて大笑いする。
ガチャ
外側からドアノブがひねられ、ドアが開く。
「おはよー！セーちゃん！朝食食べに行こ…」
声はそこで止まった。この状況を見たせいで。声の主は藤本。
「……つ…」
藤本は身を震わせながら何かを口にする。
「セーちゃんなんか不潔だー！」
彼女は寝転がっている俺にトーキックを何発も何発もお見舞いする。
…今日も一日、張り切って生きていこうか。

第９話～遠い遠い夢の中で～（後書き）

如何でしたか？次回『第１０話～教訓・軽率な発言は慎んだほうが良いでしょう～』も、どうか、帰りの電車・バスで眠くなかったときなんかに、どうぞ。

第１０話～教訓・軽率な発言は慎んだほうが良いでしょう～（前書き）

すみません！本当はもっと早く更新する予定だったのに…。本当にすみません。それでは…どうぞｏｒｚ

第１０話～教訓・軽率な発言は慎んだほうが良いでしょう～

「…。どーしたの、ソレ」
岡部が俺の体のいたるところについている痣について疑問を投げかける。
「あぁ、新手のボディペイント。格好良いだろ？」
別に事実を隠す必要もないのだが、ここはあえておどけて真実を言わないことにしてみる。そっちのほうが楽しそうだし。
「…。藤っ子、あんた、何があったの？」
「別にぃ？何で私に聞くの？セーちゃんが勝手に階段でも落ちたんじゃない？ねぇ、セーちゃん？」
ギロッ！
普段からはぜんぜん想像つかないすさまじい迫力を宿した目線。う～ん、目で人を殺せるなら俺は何回殺されるかな。すごく怖いぜ、こいつは。
「あ、あぁ…。そうだったかな…」
藤本の視線に圧倒され、歯切れは悪いがどうにか口裏を合わせる。
「ふーん…。で、あんた、藤っ子に何した？」
岡部の鋭い質問。こいつ、見抜いてやがる。って、別にばれたところで何もないけど。
「いや、だから階段でコケt」
「藤っ子に何した？」
こっちの台詞を両断して、もう一回、同じ質問を俺に投げかける。
「…。別に、何もやってない。ただ、あいつが誤解しただけだろ」
「何を？どういう風に？」
岡部の詰問。相当な迫力。朝っぱらからなんて気迫してんだ、この魔女は。
「その…だな、まぁ、何というか…。ほら、あのちっこいのいただろ？小柳とか言う」

「いや、知らんが…。まぁ、ソレについては後々聞くとして、ソレがどうかしたのか？」
「ん、そうしてくれると助かる。えっとな…。朝起きたらソレが俺に添い寝してた」
かなり短い説明だが、まぁ、間違ってはいないし、特に隠している部分もないので、要約するとこんなもんだろう。俺的採点では７５点はいけるな、１００点満点中。
「ふぅん…。ソレをみて藤っ子が『セーちゃんの不潔ー！』とか言って、お前をボコしたわけだ」
「まぁ、そんなとこだな」
一通り説明を終え、岡部の怖い視線からも逃れ、やっとで飯にありつこうとすると
「セーちゃん、今度は何？おっちゃんにまで手をつけるの？」
思い切り不機嫌な声で藤本が俺の箸を止める。
「…。ただ、朝のことを魔女に話していただけだ、馬鹿。勘違いするな」
「そうそう、別に藤っ子から田中をとろうなんて思ってないよ、私はこいつに興味ないし。今のところ」
岡部が援護する。こうもきっぱり『興味ない』って言われると少し寂しいものもあるが…。普段は敵のこいつが援護してくれただけでも、よしとしよう。
「おっちゃんは関係ないの！セーちゃんに聞いてるのっ！」
「…。いや、さっきも言ったけどさ…。つまるところ、右に同じ」
「セーちゃんの嘘つきーっ！浮気者っ！女たらしっ！好色魔っ！究極変態仮面っ！」
「全面否定する！特に最後の奴！俺はパンツかぶらんぞっ！網タイツも履かん！」
「えーい！問答無用！」
「ドンマイ！田中！重症は免れんだろうが、死ぬなよっ！」
岡部が不吉な台詞と、食べかけのベーコンエッグを残し、猛スピー

ドで席から離脱する。この状況で助けてくれる人がいるかを明確に証明せよ。
可能性その一・久保含む同室の連中、3名。殺伐とした雰囲気をいち早く察知し、藤本の班員達（岡部・藤本を除く）と共に離脱。よって、不適…（1）
可能性その二・岡部。先ほど撤退。よって不適…（2）
（1），（2）より、俺を助けてくれる人は皆無。俺様、ご臨終ケテーイ。ドンマイ、俺。以上で証明終了。
鈍い音、脳が揺れる感覚、顎に鈍痛、そして、暗転。俺の朝の記憶はここで途切れる。
・
・
・
明るい日差し。そこは…一度ばかり寝たことのある、ベッドだった。白い空間、雪が反射して、なお眩しく、白を強調する空間。ここは、医務室。
「ん？目、覚めましたかぁ？」
のんびりとした甘い声。その声の主が誰かはわかっている。高見結衣、その人だ。
しかし、俺はその言葉には反応しない。何となく。
「起きてるのは分かってるんですよ～。目、開けてくださ～い」
カッカッカッカッ
彼女が履いていると思われるハイヒールの音が近づいてくる。
音は俺の寝ているベッドの前で止まり、布団を捲り上げる。それでも俺は反応しない。
「あら？起きてないですか？うぅ～ん…」
彼女が不思議そうな声を上げ、カッとベッドから一歩離れた場所に足を置いた瞬間
「わーっ！」
後ろから思い切りおどかしてみた。

「きゃーっ！な、何何々ぃ？」
彼女は凄く動転する、いまどきあれくらいでここまで驚いてくれる人も珍しい。
さっきまで寝ていたため、視界が薄ぼんやりのグチャグチャで見えにくい。
「俺ですよ、俺俺」
「な、何？私はオレオレ詐欺にかかるほど歳を取ってませんよ？って、あぁ！やっぱり起きているじゃないですか～。田中君の嘘つきぃ」
彼女は頬を少し膨らませ、子供っぽい仕草で俺を不機嫌そうに睨み付ける。残念ながら睨み付けられても全然怖くないが。
「ところで…。どうしたんですか？体中こんなに痣だらけで…。田中君を連れてきてくれた久保君たちも口を濁すばかりで…」
「階段で転んだだけですよ、あと、ボディペイント」
ベタな言い訳と、さっきも使った言い訳をミックス。さて、彼女はどう反応するか…。流石に後者はシカトだろうとたかをくくっていると
「へぇ…。ぼでぃぺいんとっていうのは凄くリアルなんですね～。本物をわざと作るんですか？」
あ、騙された。あっさりと。つーか、階段のほうをシカトしやがった。
「まぁ、する人はします。コアな人とか」
そんな世界に足を踏み入れたことないから本当のことは分からないが、適当に言ってみる。
「へぇ…物知りなんですね。田中君」
感心された。もう少し人を疑いましょう、高見さん。
「ところで、今何時ですか？」
この部屋には…時計が見当たらないので、彼女に聞いてみる。一応医務室だから携帯はないかもしれないが腕時計くらいは持ってるだろう。

「ん～と、日の傾き具合と空腹度から計算するに…だいたい午後５時あたりですねっ」
「・・・」
開いた口が塞がらない。なんつー時間の計り方してるんだ、この人は。
「ん？どうしたんですか？」
「あ、いや…。ちょっとトイレに…」
こんな意味不明な時計なんかに時間を任せておけない。そう思い、俺はトイレを口実に外に出る。
「…。午後…５時５２分。すげぇ、あってるよ。腹時計＋日時計」
人類の神秘を目の当たりにし、俺は医務室へと戻る。
「え～と、今から…スキー講習行ったら駄目ですか？」
とりあえず、聞いてみる。
「駄目ですっ！昨日だって抜け出したでしょっ！めっです！めっ！」
指を一本俺の目の前に突き出し、禁止をジェスチャーする。なんか古臭いというか、幼稚というか…。まぁ、似合っていて可愛らしいからいいのだけども。
「とにかく…。今日は絶対安静です！いいですね？」
「・・・。へぇ～い。わかりやしたよ。旦那」
俺は半ばやさぐれて返事。
「旦那じゃないですっ！って…そんなことといって…。また抜け出す気じゃないんでしょうね？」
おぉ、彼女にしては珍しく的を得ている。
「抜け出す気です」
俺はソレに自信満々に答える。
「ひ…ひどい…こんなに私が静止しているというのに…よよよ…グシュン」
馬鹿みたいにベタな泣き真似を見せる高見さんと、ソレに呆れる俺。
突っ込もうかと口を開けた瞬間
ガラッと、扉が開く。

「こぉーんちゃーっす！」
「し、失礼します…」
「失礼シマァーッス！」
三者三様の挨拶。一発で、どれが誰だかわかる。上から、久保・藤本・小柳だ。
「…何しにきた」
わざと露骨に不機嫌そうな態度を取ってみる。実際、そんなに不機嫌じゃないのだけど。
「いや、お前がどうしてるんかなーって、思うてる奴を代表して俺ら3人のお見舞い。って、おぉ！」
わざとらしく驚いてみせる久保。んで、にんまり。こっちをみる。
「セーダイ、お前、やることやってんやな…。お前は漢やなぁ…」
感心したように、過去を懐かしむように、目を細めしみじみとして久保がこっちを見る。何だ、こいつ。
「この状況を、どう思はります？まず藤本さんから」
久保がどこかのリポーター風に藤本に問う。
「今朝のこと、謝ろうと思って来たのに…。セーちゃんの…女たらしー！やっぱり女たらしだー！」
タンッ
藤本がその場から軽く跳躍。半身起こしている状態の俺に、ひざから落下してくる。
ドボッ
鈍い音、股間にクリーンヒット。どんな報いを受けようが、平然としているつもりだったがソレは反則だ。
「んま、仕方ないやんか。セーダイが女たらしやもん。実際、バス子ちゃん泣かせとるし」
「泣き真似に決まってるだろ！ねぇ？高見さん」
俺は必死に援軍を求める。
「女たらしの田中君にいぢめられましたぁ…」
援軍は、敵につきました。戦況最悪。

「まぁ、それも聖大の人柄だからね～」
これは、俺を擁護しているのだろうか…。そうなのだろうけど（小柳の性格上）、絶対に擁護されてないと思う。
この状況を打破するには、とりあえず俺の上に馬乗りになっている藤本をどかさなければ始まらない。
「あー、そのだな…。藤本」
「何さ」
うわー、すっげぇ不機嫌…。奥の手やるか、小坊以来だから今でも効くか分からないが。
「どかないと、キスするぞ」
勿論、ハッタリ。
「え、あ…。えぇ！？」
さっきまで馬乗りになっていた藤本は俺のスネから腰を浮かす。効いた！スキ有りッ！この隙に離脱する！
グイッ
「んがぁ…？」
顎を掴まれ、藤本に引き寄せられる。予想外の展開に挙動不審していると…
チュッ、と唇を奪われた。
「…な、何すんダよっ！？」
動揺で声が裏返る。動悸が激しくなる。ドクンッドクンッ！心が熱く、燃え尽きてしまいそうに。
「・・・もん」
藤本の声が小さいのと動揺がプラスされ、何を言っているのか聞き取れない。
「今、何て言った？」
俺は、彼女に聞く。
「キス、相手からされるくらいなら、自分からするもんっ！」
「んが…」
俺があっけにとられていると…。

「まぁ…♪」
「うわぉっ♪」
「何してるーっ！！？」
これまた、ソレを見ていた3人の三者三様の返事。上から高見さん・久保・小柳。
「大ッ胆やなぁ…自分ら」
いや、俺は何もやっていない。
「若いっていいですねぇ～、私もあと五年若かったらなぁ…」
高見さん、そんなこと言ったら22歳以上の人たちに失礼です。
「聖大はボクのモノなのに～ッ！！」
わけわからん、こいつは。
「あ、そうそう。セーダイ、飯やぞ。皆待ちくたびれとるぞ」
久保が思い出したように、重要なことをさらっと言う。
「そういうことは早く言えよ！」
「うん…っと」
藤本がベットから降りて、こっちを見る。頬がまだ赤いっての。まぁ、俺もだけど。
「じゃ、ご飯食べに行こうか…」
「あぁ、そうだな…」
お互い頬を赤らめながら、それでも、言葉だけは平静を保って歩き出す。
「あ、ちょっとボクも行くー！」
「ちょっと、私を見捨てるのですか～？私もお腹すいたのに～！一緒に行きましょうよ～！私、ひとりにすると死んでしまうんですよー！」
久保・藤本・そして、俺の3人の後ろを少し早歩きで小柳と高見さんの二人が追いかける。俺たちはこんな状態で宴会場へと向かうのだった。

第１０話～教訓・軽率な発言は慎んだほうが良いでしょう～（後書き）

いやぁ、本当になんと申したら…。
あ、如何でしたか？どうにか、二桁です。話数が。
これも皆様のおかげです。
次回『第十一話～美しきかな、人生～』も、どうか、貴方様の時間の都合の許す限り…。

第１１話～美しきかな、人生～（前書き）

巻き返し（？）のため、高速うｐです。
そういうわけで、今回も（こそ？）皆様方の暇つぶしになりますように…。

第１１話～美しきかな、人生～

じろり
じろり
じろり
他方向から、四方八方から、あらゆる角度から睨まれる。そりゃそうだ、食事の時間を軽くオーバーしてる。メチャクチャ腹減ってんだろうね、こいつら。どうもすいません。
教員たちも早く飯を食いたいのか、俺たちに何も言わずいつもの儀式を始める。「合掌」「いただきます」と。
ざわざわカチャカチャチンチンチン…
皿とフォークの衝突音、喋り声、色んな音の奏でる曲の中での楽しいお食事。楽しいディナー。まぁ、ソレは俺たちのところでも例外なく繰り広げられている。俺をネタにして。
「ときに、ぷれいぼぅいなセーダイ君に質問なのだが…」
久保がニヤニヤして俺に話題を振ってくる。こういうときのこいつは撒くのが実に面倒だ。
「あんだよ」
少し不機嫌そうに対応。こいつらさっきから俺と藤本の事を大声で話しすぎてるから、実際少し腹が立っている。恥ずかしいの方が大きいけれど。
「お前がこれだけ可愛い娘たちにもてるのにお前より顔立ちの良い俺が可愛い娘たちに全然もてないのは何故かね？」
「知るか、性格悪いからだろ」
適当にあしらってみる。
「久保、お前はまだもてる方だぞ！試合でお前がボール持ったときの声援の質が俺たちとは違うもん」
「俺らはなぁ…。本当にもてねぇんだよぅ…。なぁ？川口ぃ？」
「「うぉおっ！お前は友だっ！」」

松永と川口がひとつの絆で結ばれた熱い友情劇を見せる。つーか、
『暑い』のほうが正しいな。表現は。
「・・・ほも？」
冗談とはいえ、抱き合ってる松永と川口を見て、岡部がつぶやく。
うわぁ、ひでぇ。
「んなわけないでショうがッ！？岡部さん！」
松永が顔をまっかっかにして必死の反論。声が裏返ってるって。声が。
「だって、男子校だし。アリかなぁって…」
「なシですよ！まっタくっ！」
松永はさっきから声が裏返ってばかり。あぁ、そういえばこいつ岡部に一目ぼれしてるんだっけ？（４話参照）
「松永。興奮しすぎ、少し落ち着け。魔女も、冗談でもそういうこと言うなよ。こいつには」
とりあえず、松永をなだめる。
「えぇー、詰まんねぇツマンネェつまんねぇぇぇえ！」
ガチャガチャガチャガチャッ！！
岡部が駄々をこねるように、フォークで皿を叩きまくる。
「おっちゃん、うるさい」
「…はい」
藤本が一瞥し、岡部はそれに素直にうなずく。普通じゃあ考えられない光景に少し混乱する。
「…岡部さんや、お前にしては珍しく素直じゃないかい。どうしたのさ」
真相を小声で岡部に聞いてみる。
「藤っ子な、アレなんだよ。腹減ってると凄く凶暴なの。だから、今もその余波があると考えていい。よって、逆らわないほうが吉。私も最近気づいた」
「ふぅむ、なるほど。食い意地が張ってるんだな」
ギロッ

睨まれた。うん、こりゃ確かに怖い。
「私たちはシカトだねー、美穂ちゃん。どう思う？私たちだってヒロインなんだよ？」
「ひろいんってにゃにぃ？ヘロインの仲間？麻薬はよくにゃいよ～。お姉ちゃん」
こっちはこっちで何か打ち解けている。同じ電波キャラ同士、周波数が合ってるのかな。つーか、小柳のろれつが回ってないのだが…。
「んにゃ～、聖大も酒飲め。酒ぇ～」
あ、酒飲んでたのね。
「いや、俺未成年だし…。先生いるし。つーか、お前も未成年か」
「んだにゃらちくしょぉ～。ろれにょしゃけがにょめにぇってぇにょきゃいぃ？」
「お前、翻訳必要。頭から訳せ」
酔っ払いは冷静にあしらおう。乗せてしまったら危ない酔っ払いだ、こいつは多分。
「えーとねー。『んだなら畜生、俺の酒が飲めねぇってぇのかい？』って言ってるんですよ～、きっとー」
酔っ払い翻訳機、高見結衣。酔っ払いと正常人をつなぐ夢の架け橋。
「そんな定番みたいなこと言ってたんですか、奴は」
と、そんなことを言っていると、背後から声。
「ろい、きょら、聖大ぉ…。あたしゃをほおっといれ、おかにょおんにゃとちゃべってんじゃねぇろ！…くぅ…」
何か、小柳が俺に絡もうとして、途中で精根尽き果てたみたいだ。
「今のうちに、医務室へ運んで起きましょうか」
「ん、そうですね。また何かワケの分からないこと言われそうだし」
そういって、小柳をおんぶすると
「にゃー！セーちゃん！何を、何を～！？」
藤本が悲鳴を上げる。
「何もやってない！ただ、こいつを運ぶだけだ」
「駄目駄目駄目ー！セーちゃんは私以外の女に触れたら駄目ー！」

こいつ、酒入ってんのかな。かなりテンション高いが。
「んなの無理に決まってるだろ！つーか、何だよそのトンデモ設定は！」
「だってー！私のファーストキスだったんだよぉ！？だから、触れたら駄目ぇ！」
彼女が顔を真っ赤にして、そういう。俺も真っ赤になっているな、となんとなくわかる。んで、言葉の深い意味を考える。
「…。遠まわしに告白？」
ちょっとおどけて聞いてみた。正解だとこの上ないのだが。しかし、この場面で答えられるのはまずいな。周りに久保たちはおろか、他の生徒や先生までが騒いでるこっち見てるから。
「いまさら告白なんてないでしょぉ！もう、私とセーちゃんは好き合ってる設定なのん！」
『なのん』て…。って、いいやがったよ。もうちょっと周り考えろ、馬鹿！
上之保学園生の反応。
「ヒュゥー！！セーダイ、返事はどうなんだよ！？」
前橋高校、男子生徒の反応。
「嘘ぉぉ！！俺たちの藤本がぁぁぁぁぁ！！」
これは、親衛隊みたいなものか？つーか、まずいな。実に。この状況で俺がとる手段は…。
「ちょっと、医務室に逃げ込みますんで、かくまって下さい！あと、小柳頼みます！ほら、ゆっちゃん行くぞ！」
一応高見さんに断っておく。んで、藤本の手を引っ張る。
「え！？あ、うん！行こ！」
宴会場の出口まであと少し！と、いう時に…目の前に影。
「ちょっと待て、セーダイ。しっかり話を聞かせてもらおうか」
上之保オールスターズこと、上之保学園教師軍団の誇る最強の武力集団。総員１２名勢ぞろいときたもんだ。そういや、うちの学校は付き合ったら駄目なんだよな…。

「じゃあ、こっ…」
じゃあ、こっちだ！と、もうひとつの出口に目をやると、そこには前橋高校藤本親衛隊の影があった。その数、実に４０人超。こっちの突破は不可能だろう。
「くっ！」
じりっと、オールスターズに距離を詰められる。腹ぁくくるしかねぇと半ば諦めていると
「とぅっ！」
ドスッ
２メートルの巨漢（とはいっても、スリムだが）がオールスターズの一人、酒井（剣道４段）に横からヒップアタックをぶちかます。
その正体は久保。
「な、何やって…」
「チョアァァッ！」
「セイッ！」
ノーモーションの延髄が左右同時に２発。その様はまさに猪狩完至（わからなかったら『グラップラー刃牙』の３０巻当たりを見よう！）。これまたオールスターズの一人に攻撃を加える松永・川口の姿があった。
３人に触発され、
「人の恋路に茶々いれてんじゃねぇ！」
上之保学園生徒が内乱を起こす。
「おめぇら邪魔だからさっさと消えろ！」
「あーもう、どこででもストロベリってろ！こんなとこでやられたら萎えちまう」
「ばっはは～い♪結果教えろよ？」
三人が俺たちの脱出経路である宴会場出口の周りをしっかりと固める。
「どーいう展開だよ！これぇ！・・・。でも、まぁ…。久保、川口、松永…ありがとな！行くぞ、ゆっちゃん！」

「うん！セーちゃん！」
俺たちは駆け出す。
廊下を抜け、医務室を通り過ぎ、来た場所は俺の班の部屋だった。
「結局ここに来ちまったな」
「ま、どこでもいいじゃん♪で、答えは…？」
「そうだな…。もし、誰かに聞き耳立てられてたら先公たちに言い逃れできん。よって…」
くいっ、と、彼女のあごを右手で優しく上に持ち上げる。
チュッ
半ば強引にだが、軽く、彼女と唇を重ね、すぐ離す。
「こうやって、行為で示すとしようか」
ぱっと両手を広げて、おどけてみせる。
どんな顔をしているのかと、彼女の顔をのぞくと
「もー！いきなり口もふかないでしないでよ。マナー違反だよ、ケチャップついちゃったよ…」
台詞は動じていない風だった。電気をつけていないのでうっすらとしか彼女を確認できないが、彼女が耳まで赤くなっていることはわかった。もちろん、ケチャップのせいではない。
ただ、ただ破滅的に暗い新月の夜に、ただ、ただ破滅的に明るい二人。今にも闇に溶けてしまいそうに細く、弱弱しく、それでいて、揺るぎなき、芯の通った極薄極小の光。
俺は、ソレを、彼女を純粋に守りたいと思った。永遠に消えてしまわないように。
久保たちがこの部屋に入ってくるまで1時間、その間俺たちは数え切れぬほどキスをした。

第１１話～美しきかな、人生～（後書き）

如何でしたか？
これでどうにか約半分終了です。
次回『第十二話～大浴場にて大欲情っ！！？』も、どうか貴方様の時間の都合が許す限り宜しくお願いします。

第１２話～大浴場にて大欲情っ！！？～（前書き）

あらすじ。主人公に彼女が出来た。
ま、そういうわけで、今回もどうぞ。

第１２話～大浴場にて大欲情っ！！？～

「たっだいまー！」
岡部たち、藤本の友人班がお岩さんの男バージョンが三人ほど引き連れて帰ってきた。
「ただいまっつってもお前の部屋じゃないけどな。それはいいとして、後ろのスプラッターホラーな面々は何だ」
「おい貴様。身を挺してお前を助けた勇者にかける第一声がそれか？」
何か、マジギレだった。
「すまんすまん、でも、まぁ…ありがとな。お前ら」
「ふん、まぁ、別にえぇけどな。マジモードは似合わんて、俺らは」
久保たちがぼこぼこになってる怖い顔でけらけらと笑う。ホント、いい奴だよな。こいつら。馬鹿だけど。
「セーダイ、今、俺らのこと馬鹿って思っただろ」
くっ、川口の奴…。鋭い。読心術か！
『前橋高校、６組、７組の皆さん、上之保学園、Ｇ組、Ｈ組の皆さん、５分後よりご入浴のお時間となっております。第二浴場までお越しください。繰り返します…』
「んお、風呂か」
「ま、そういうわけで俺たち風呂に入らんとあかんから…。優ちゃんたち、またあとでな」
久保がアナウンスを聞き、軽く挨拶する。
「うん、じゃ、風呂上りにまたね～」
がちゃん
ドアが閉まり、藤本たちが俺たちの部屋から退室する。
「・・・さてと、だ。お前らちょっと来い」
久保が意味ありげな笑みを浮かべ、俺たち三人を手招きする。
「さっきのアナウンス、聞いたよな。前橋校の人たちも同じ時間に

入浴するということを」
「「「さ、さては！お前！」」」
綺麗な男だらけの三重奏。自分でやっときながら本当にいっやぁー…な濁声三重奏だな。うぇ、キショ。
「気づいたみたいやな。そや、覗きやぁ！男のロマン！男人的波浪漫！」
「いちいち中国語に直すな。それ、読めないだろ。お前」
エキサイトで翻訳したような即席中国語に突っ込みを入れる。
「うん、読み方なんて知らんよ。ダンジンテキハロマン！」
普通に肯定する久保。まぁ、オンドゥル語みたいな凄い発音はシカトするとしようか。
・
・
・
およそ１０分後、大浴場
「大浴場、フォー！！」
奇声とともに２ｍ男が浴場に乱入する。全裸で。
「どうも～。ハードふたなりで～す！えー、今日はっ！希望閣という旅館のっ！大浴場に来てますオッケ～！」
普通にしていても高いのに、今は輪をかけてテンションの高い久保（全裸）。全裸で腰振るな、気色悪いから。
「おい、久保。何があったかは聞かないがタオルくらい巻け」
川口がぽいっと腰巻タオルを一枚久保によこす。何で余分に腰巻タオルを持っているのかは聞かないことにしよう。それに対する久保の反応は
「さぁ、今回、私の手元に送られてきた一通の依頼葉書を読み上げたいと思いますオッケーイ」
見事なシカトだった。ついでに久保は、隠す場所などどこにもないはずの股間の辺りから一通の葉書を出す。魔人かこいつは。
「・・・はぁ」

川口、こうなった久保が俺ら如きで止められないのはわかっていただろう？そう、ため息つくなよ。
「岐阜県の田中セーダイ君（１７）からのお葉書です。『ハードふたなりのみさくーラモン久保さん、こんばんは』はい、こんばんは～。『僕は修学旅行でここ、希望閣に泊まっているのですが、出来立てほやほやの恋人が隣の女湯にいるようで、とても様子がとても気になります。ハードふたなりさん、何かいい手段はないでしょーっか？』う～ん、実にびゅーてぃふるな質問ですねー！」
「勝手に人の名前使うな。つーか、俺はセーダイじゃねぇ。つーか、その葉書ジャンプのアンケート葉書じゃねえか」
俺はすぱーんと桶で久保の頭をたたく。
・
・
・
「…。つーかな、俺はな、このときを待っていたんや。マジで。このボロ旅館にきて、２日間かけて、女湯に入るルート・計画を作り上げた。しかし、問題がある。定員が４人ということだ」
かぽーん、浴槽に入り、目をつぶり、いかにも深刻そうな面持ちで自分の馬鹿を露呈する久保。駄目だこいつ、重症だ。
「ん、ぎりぎりじゃないか。人数」
松永が久保・俺・川口・そして自分を指差し、問題ないじゃんと首をかしげる。
「馬鹿、問題大有りだ。つまり、だ。クラスメイトに見つかった場合、共犯に出来ん。下手すれば、と、いうか、まず確実に密告られる。ミスは許されんのだよ、松永軍曹」
「軍曹て…。まぁ、それはいいとして、そのルートを説明してもらおうか」
と、川口。俺はあえて沈黙を貫く。
「この浴槽、にごり湯だな。実に。リウマチとかによさそうだ。っと、んなことはどうでもいいんだ。にごり湯。これ、重要ね」

興奮してるせいか、久保から中途半端な関西弁が消える。鼻息荒いんですけど～？久保さーん。
「いい加減引っ張るなよ、にごり湯が何なんだ？まさか、素潜りでもする気じゃないんだろうな？」
川口が引っ張りまくる久保に突っ込みを入れる。俺はやっぱり静観を決め込む。
「まさか、誰がそんなアナクロなことをすると思うか。脳みそ煮えてるんじゃないのか？」
「お前より数十倍ましだと心得ているつもりですがね～。つーか、マジで覗きやるの？」
川口が憎まれ口とちょっとビビリを含んだ声で改めて問う。
「と、まぁ、戯言はここまでとして…。ちょっと、こっち来い。今から説明する」
久保が俺たちを一箇所に集める。
「ゴニョゴニョ…。と、ま、こんなもんなんだが…」
定番のゴニョゴニョ音で覗きの手口は隠すとして、問題だ。進入までは１０兆歩譲って良いとして、これって、侵入したあと本当にばれないのか？
「じゃ、行くぞ！」
「「オウ！！」」
久保の掛け声に二人の勇者、もとい愚者が反応する。
「俺は行かないからな」
俺一人反論。たった一人の戦場。遠く離れた地にいるお父さん、お母さん。僕は犯罪者からの甘い誘いに乗りませんよ。草葉の陰で見守っていてください。
「草葉の陰って、故人に対する言い回しやなかったか？」
久保がにゅっと顔を前によこす。うわ！つーか、人の心読むなボケ！
「まぁ、それはいいとして…。優ちゃん、６組だから今覗きに行けばおるけど来ないんか？」
悪魔の甘い誘い、禁断の果実。ぼ、僕は…。

「…。行く。ばれないんだよな？絶対」
「やっぱり男だな、セーダイ。安心したぞ、てっきり去勢したオスかと…」
その場で木造の天を仰ぐ。すみません、お父さん、お母さん。貴方たちが次に僕を見るのは刑務所かも知れませんね。
所詮、第一次欲求に逆らえる生き物など存在しないのです、世の中。生物最強ですら逆らえなかったんですから。
「まぁ、そういうわけで…」
久保が仕切る。
「覗き敢行だ！！」
「「「応ッ！！！」」」
なんだかんだ言ってノリノリじゃん、俺。

第１２話～大浴場にて大欲情っ！！？～（後書き）

如何でしたか？
それでは次回『第１３話～大浴場にて大欲情っ！！？補足編～』も
貴方様の時間の都合の許す限り…。

第１３話～大浴場にて大欲情っ！？補足編～（前書き）

あらすじ。女湯に覗きに行こうとしてる。
それでは、第１３話をどうぞ。

第１３話～大浴場にて大欲情っ！？補足編～

・
・
・
久保、川口、松永、そして俺の４人は一切の滞りもなく女湯に潜入した。そのことが問題すぎるような気もするが…まぁ、置いとくとしよう。
「しっかしまぁ…これで本当にばれないもんかねぇ？」
かぽーん。
松永が湯船に浸かって久保に問いかける。
「まぁ、昔っから木を隠すなら森の中って言うだろ？それの応用だ、応用」
かぽーん。
久保が問いに答える。応用？応用なのか？これは。
あ、そうそう。今の状況を伝えようか。
今、俺たちは湯船に浸かっている。女湯の。周りは勿論、女性。女体、フィーメェール！そんな中に男が４人入っているのに彼女たちは気にも留めない。
「かつら効果…か？それとも存在感なし？」
川口がぽっと口に出す、その台詞。かつら効果。決して、桂正和先生のエロエロ効果ではなく、そのままの意味で俺たちはかつらを被っている。長い長い、黒々した髪を。
その成り行きについて少し、フラッシュバックするとしよう。
・
・
・
数分前
『今から、侵入を敢行する。しかし、その前に…だ』

久保がまたも隠す場所など何処にもないはずの股間から黒い物体を取り出す。
スルスルスルッ！
『何だこれは。凄く卑猥な臭いがするのだが』
『むぅ、それは激しく素晴らしく気のせいだ。安心しろ、ただのヅラだ、ヅラ』
そういって久保はかつらをパサっと被る。他の2人も。
『言ったな、男に二言はないぞ？』
『うむ、任せろ。そういうわけで今からこの俺が2日間かけて極秘で黙々とタイル張りをはがし素手で掘り続け、穴を開け開通させた男湯→女湯トンネルへと参るぞ』
『結局、素潜りじゃねぇ？ってか、えらく説明臭いな』
『でぇい、気にするな。お約束だ』
『安心しろ、俺の突っ込みもお約束にのっとってだ』
・
・
・
そして、現在に至る。
「にしても、川口。お前、ヒゲ剃ってないのかよ。あごの」
川口の女装するのにナンセンスな部位を指摘する。
「これは俺のアイデンティティだからなぁ…。剃れって言われたところで剃れるもんじゃないからなぁ…」
いや、剃れるだろ。と言う突っ込みは心に留めておくとする。
「ま、そゆことで、だ。帰るか」
久保があっさりと言う。
「「「え？これだけ？」」」
それに俺ら三人揃って驚く。
「いや、だって。考えてみ？ここで見つかったら俺ら立派な犯罪者やぞ？まだバスケの大会はあるんに。そんなバカな真似できんやろ」
「・・・。今でも十分犯罪だけどな」

冷静に突っ込み。
「セーダイ、あのな。ばれなきゃ犯罪じゃないんや」
「それって結構人間として終わってる奴の発言だぞ」
気がつけば久保にあの中途半端な関西弁が戻っている。興奮が少し収まったようだ。
「じゃ、帰るか…」
俺たちがトンネルへと潜水しようとしたそのとき
ガラッ
戸が開く。
侵入者により、俺たちの動きは止まる。侵入者が何しろ…アレだったのだから。
そう、藤本・岡部班。そして、あろうことか、プラスアルファ。コードネーム・バス子。
「あーもー！藤っ子がのろのろしてるからもう皆入っちゃってるじゃないのさー！このバカ藤！」
パコーン…パコーン…パコーン…コーン…ーン…
風呂場に洗面器で藤本の頭をたたいた音がこだまする。いい音だ。
まるで頭の中に何も入っていないみたいに。
「いったいなー！夜食選んでただけじゃないのっ！ほら、おかげでいっぱい買えたじゃん。バニラアイス・チョコアイス・抹茶アイス・チョコチップアイスに～…」
「全部アイスだっつの！今冬だぜ？しかも、カップアイスなのになんでスプーン貰って来ないんだ…よっ！」
夜食とやらを語る藤本に岡部が絡む。
パッコーン！
さっきより一段と強い桶の音。
「いったぁ～い！ぶぅ～。いいですよいいですよぉ～！アイス美味しいんだから！冬はコタツで食べるから季節とか関係ないもん！スプーンないならフタで食べるからいいもん！」
「あー、はいはい。そうですね。もういいわ。あんたと話してると

疲れるから…」
「まぁ、どの季節でもアイスは美味しいですよね～」
ぽややーんとした、和み系の声が間に入る。
「・・・。おい、来たぞ。メインが」
久保が声を潜める。
「魂魄ノ華　爛ト枯レ、杯ノ蜜ハ腐乱ト成熟ヲ謳イ例外ナク全テニ配給、嗚呼、是即無価値ニ候……！！！！」
「落ち着け！落ち着くんだ松永！」
何か、死徒になりかけている約一名を川口が静止する。
「とりあえず、見るもん見たし。ばれないうちに逃げるぞ」
俺がある意味死にかけ（つーか、死んでもいいような心境？）の久保と松永を水中に引きずり込もうとすると…そのとき、ガチンコ覗きクラブのメンバーにとんでもない出来事がっ！
「欣求浄土ぉっ！！」
ザッパァーン！
怒声とともにすさまじいほどの水しぶき。えーと、何か色々と青少年の育成に良くないです。はい。
何故悪いか、その理由は岡部が俺たちの頭上を飛び越え、浴槽にダイビングしたからだ。まぁ、詳しくは言わない。上見てなかったし。上向いていた松永には見えたと思うが。
「功徳が足りないので無間に落ちてきます…」
「行くな！行っちゃ駄目だ！松永！貴様は御年１７でこの世を去るには惜しすぎる！せめて高卒まではっ！」
川口が必死に止める。流石このグループの歯止め役。別名振り回され魔人。あ、それは俺もか。
「何で上を向いていなかったんだ俺はーっ！！」
久保がぶちギレ金剛。もとい、ぶち切れ。
「…あんた達、誰？いたっけ？あまり見ない顔だけどさ…。いや、見ない顔じゃないな…。見た顔だ。でも、ウチの学校にはいなかったよね？」

岡部が俺たちに気づき、鋭くいい場所をつく。
「アレ？あたしたちってそんなに存在感ないのかなぁ…。ほら、5組の武知よ。ほら」
「ふぅむ…？」
久保が脅威とも言うべき素晴らしい声色で岡部たちをだまそうと試みる。久保には妙な自信があるようだ。実際、声色は女性のそれとほとんど一緒だし。
「それじゃあ、あたしは風呂から上がるけど、三人ともどうするの？」
久保が俺たちに聞く。上がれるものなら上がってやりたいが、あれが…。うん。
「・・・」
そんなわけで、沈黙。下手に声出してばれると嫌だし。
「ちょっとぉー！おっちゃん何してるの～？お風呂はちゃんと私の背中流してからだよぉ～」
「あ？あぁ、すまんすまん。ちょっとやってみたかっただけだ。悪ィ、今あがるから」
ザパッ
彼女が風呂から上がる。俺たちに背を向ける。
「今や、お前らはさっさと来た場所から帰れ。俺は更衣室から逃げるから」
久保がヒソヒソ声で俺たちに指示を出す。
「「「おう」」」
俺たちも揃って反応。
ドプン
一斉に潜水を開始する。しかし、久保はどうするつもりなんだろうか。
・　・　・

その後、何事もなかったかのように、久保と俺たちは部屋でおちあった。
「なぁ、久保。お前あのあとどうやって出たんだ？」
思い切って聞いてみる。
「俺はな、事前に色々準備する奴なんや。ああいう状況も岡部ちゃんの性格上ありうると踏んでいた」
「んで？」
川口が合いの手を加える。
「つまり、事前に5組のデ…恰幅のよろしいお方の名前、スリーサイズを調べておけば、ある程度はごまかせると踏んだ。顔は髪で隠せば何とかなるしな」
「まぁ、それはいいんだが。何をやったんだ？」
と、今度は松永が質問。
「わからんかなぁ、つまり、肉じゅばんっつーか何つーか、まぁ、とにかく偽造肉を用意し、それを体にはめただけだ」
「でも、侵入したときそんなの持ってなかっただろ？」
最後は俺が質問。
「いや、かつらと同じところに隠しとったぞ。お前らが見つけれなかっただけで」
「「「・・・」」」
一同、あいた口がふさがらない。もういいや、突っ込まないでおこう。
・
・
・
その後藤本たちも含めてくだらない話をして、俺たちは眠りについた。

第１３話～大浴場にて大欲情っ！？補足編～（後書き）

如何でしたか？
次回『第１４話～付き合ってる人たちを邪魔するのって結構面白い～』も、どうか貴方様の時間の都合の許す限り…。

第１４話～付き合ってる人たちを邪魔するのって結構面白い～（前書き）

あらすじ。覗きは無事成功した。
と、そういうわけで、第１４話どうぞ。

第１４話～付き合ってる人たちを邪魔するのって結構面白い～

・
・
・
ピンク色の霧。
そこを抜ける。何の苦労もなく。
ふわり
と、した空間。これが夢なのは承知している。ただ、いつもの夢とはどこかが違う。まぁ、どうでもいい。夢だ。夢…。
次の瞬間、甘い声。例えるならピンク色。
「…ゃだよぅ、セェちゃぁん…」
この甘い声には聞き覚えがある。誰か、その問題は簡単すぎる。藤本だ。そして、確信に近い推測を更に核心に近づける裏づけとなる視界の回復。彼女は俺の幼馴染で、俺の初恋の人で、俺の…俺の…その、うん。その…出来たての…恋人。
その彼女が何をしているのか、はっきりと見えてきたおかげで分かる。アレだ、アレの直前なんだよ。うん、その、放送禁止用語。相手は…俺か？でも、俺はここにいる。あぁ、そうか。今回は傍観タイプの夢か。なんて冷静に分析してる場合じゃないっての。
に、しても、付き合い始めて、キスして、裸を見た（覗いた）それだけ（それだけってもんでもないのかも知れないが）でこうなるとは、俺は相当バカかもしれない。
パチン
ふと、目が覚めた。
熱源反応のある右方向に９０度首を傾ける。そこには…久保がいた。
「ん～、やっと起きた？すっごく暇やったから横でちょっかい出してたんや。お前が良い夢見れるようになっ」
そういう久保の右手には『誰でも出来る！夢操作法』なるものがあ

った。・・・。俺がさっきあんな夢見たのはこいつのせいじゃないだろうな。いや、多分こいつのせいだな。
まぁ、寛大な俺はそれを置いとくとして、時計に目をやる。
3時23分。
何考えてるんだこいつは。
「おい、今3時回ってんぞ。何考えてるんだっつの！」
「あ、その時計ちょっと進んどるぞ、3分くらい」
久保が訂正を加えるが3分変わったところで関係ない。
「ティネッ！ティネッ！」
がすっがすっ
寝転んでる久保の腹を数回蹴飛ばす。
「あ、あぁんっ！もっと、もっとぉ～」
久保の凄く艶っぽい声。俺は非常に萎えたので攻撃をやめる。
「ごめん、久保。今、純粋にお前のこと気色悪いと思ったわ。純粋に引いたわ」
とりあえず謝る。
「うん、こっちこそすまん。ありゃやりすぎやったと思う」
久保も謝る。何か妙な間が…。
「っと、そうそう、何で起こしたか。や。実は寝付けんで暇やったから起こしたわけやない。ちゃんとな、あるんや。ワケが」
「あ、あぁ、そうなのか。んで、何があった？」
久保がいきなり真面目な顔になる。俺はそれにたじろぐ。
「いや、な。あの、夢見たんや。凄く嫌な。何が嫌やったかいまいち分からんのやけど、とにかく嫌な夢やった」
久保が凄く真剣に語る。
「それで怖くなって俺を起こしたとか言うなよ？」
「ふざけんなや、忠告や。忠告」
俺のボケもあっさりシカト。こりゃ、マジだ。
「忠告？」
そのキーワードが気になったからとりあえず聞いてみることにする。

「あぁ、断片的にしか覚えとらんのやけどな、今のこの状況に夢を当てはめるとどうもお前のことみたいやったから」
「幸せな恋人たち。怒り、叫ぶ黒髪の長身の青年。泣き崩れ、格好もボロボロの少女」
久保は語る。夢の内容を。
「ここで、俺の夢は終わり。顔とか何とかは覚えとらん。でもな、俺ってよく正夢みるんや。今日みたいに断片的に内容覚えてるときとかは特に正夢の可能性が高い」
「へぇ…。んで、お前は長身の男を俺、ボロボロの少女をゆっちゃんって言いたいのか？」
「ん、まぁ、そういうことやな。でも…あ、いや。俺、何か変な事言いよるわ。気にせんといて。やっぱ」
久保が何かを思ったように、くるっと俺のほうとは逆を向き、布団を頭からかぶさり顔をうずめる。
「・・・。そうされると気になるだろ」
「すまん、すまんから忘れてくれ。やっぱ、おかしいわ。この夢。もっかい見直す…。お休み…」
「おい！久保！久保っ！」
ゆさゆさと体をゆするが反応はまったくなし。人を起こしておきながら自分は速攻で寝るとは…。まったく…迷惑な奴だ。
「さてと、俺も寝るか…」
別に、何がどうという訳でもないし、起きている理由はない。そういうわけで俺は寝る宣言をひとりごちる。
本格的に寝付こうとしたそのとき
カチャリ…カチャン
ゆっくりとドアが開き、ゆっくりと閉まる。音を立てないように、静かに静かに…。
「…。なーにやってんだ。お前ら」
暗闇に浮かぶ人影に声をかける。
「お前らじゃあ俺たちが誰なのか読者に分からないぞ」

暗闇もとい、松永は答える。隣にいるのは川口。
「読者って何だよ」
「あ、いや。こっちの話だ。気にするな。っと、そうそう、久保は寝たのか？」
「あ？あぁ、今さっき寝たよ。で、何してたんだ？」
「松永が夜這い夜這いしつこいからな…。俺まで行かされた…。ちっ」
川口が凄く不機嫌そうな感じで松永の代わりに答える。こいつ、不機嫌な時っていつもと凄く雰囲気変わるよな。まぁ、シナリオにはあまり関係ないけどさ。
「まぁ、やることやったし。俺も寝るんだけど…。セーダイと川口はどうするんだ？」
「俺は…目覚めちまったしな…。もうちょっと起きとくわ」
ぽりぽり頭をかき、俺はそう応答する。
「俺は、寝る。すまんな、セーダイ。今はちょっと…付き合えん」
「お、おぉ…。お休み」
いちいち睨むなよ、こっちを。ヒゲ面、細目で頬はこけているお前がそういうことをすると本当に怖いんだからさ。
「んじゃ、お休み～」
もふっ
と松永・川口の両者は布団にもぐる。
・
・
・
あれから30分、俺は窓を開け、ずっと外を見ていた。久保の言った言葉が頭を離れなかったから。凄く不安で…不安で…。
「…っくしっ！んあ～…ちょっと冷えたかな…ぐぅ…」
ずずっと鼻をすすり、窓を閉め、寝ることはないにしても布団に潜ろうかとしたら、俺の布団の隣がもっさり膨らむ。
久保が…起きた。

「・・・。あぁ、セーダイ。お前まだ起きてたんか…。あほとちゃうんか？」
ニヤッとした笑みを久保が浮かべる。
「けっ、うっせ」
こっちも、笑い返す。
このあと数時間、取り留めのない話をしながら、夜を明かす。単純な話徹夜。
・
・
・
「さてと、ゆっちゃんでも起こしに行って来るわ」
俺は未だに起きない松永・川口を久保に頼んで藤本の部屋に向かう。
カンカンカン
階段を上る。俺の部屋は3階。彼女の部屋は6階だ。
コンコン
彼女の部屋の前に来て、ドアをノックする。
ガチャリ
ドアが開く。
「あー？誰ー？あー、お前ー？」
ドアから出たのは、岡部だった。寝起きだからか、髪がボサボサだ。完全に。元の綺麗な金髪が勿体無いというもの。
ガチャリ
ドアが閉まる。
「ちょっ…待っ…！おいっ！」
予想外の行動に俺の口から出てきた言葉はあまりにも月並み。
「ねぇ、おっちゃん。誰だったの？ノックした人」
「あー。その、アレだ。ジョセフ」
ドア越しにその声が聞こえる。誰だよ、ジョセフって。
「ぐふふとか言ってたけど、気にするな。二重人格だからさ、あいつ」

「？」
…。あのジョセフか…。って、おいっ！俺だっつの。
ドンドンドンッ！
ドアをノック、というより激しく叩く。
「俺だっつの！おいっ！ゆっちゃんって！」
「ニャーッ！」
俺の怒声と同時に岡部が狂った声を出す。見事に俺の声はかき消されただろう。
「ど、どどどどうしたの？おっちゃん」
「いや、一瞬、猫又の霊が…」
・・・。ふぅ
「もう、いいわ」
今、藤本に会うことを俺は今、諦めた。
「あー、ごめんごめんっ！冗談だって。ほら、入れよ。田中」
ガチャリ
今度は俺を中に入れてくれた。
「…。やっぱ、魔女だな。お前」
中に入って、一呼吸おいて、俺は岡部に向かい言い放つ。
「お褒めに預かり光栄です♪」
「褒めてません。貶してます、罵ってます」
「お褒めに預かり光栄です♪」
「そんな君が大好きだ」
「虫唾が走るぜ不能が」
・・・。コンマ単位で何て切り返しだ、こいつ。喋りでこいつには敵わないな…。
「セーちゃん、不能なの？」
横で、藤本が心配そうにこっちを見る。
「ち、違うっつーの！」
俺はもちろん不能じゃない。
「だ、大丈夫だよ！今の医療技術は凄いから！」

あー、何か勘違いしてるぞ…。この娘。
「それはそうと…。朝飯、間に合わないぞ。このままだと…。ほら、早く行くぞ。まったく、お前ら朝からなんて会話してるんだよ…」
こんな状況に陥れた張本人が偉そうにものを言うな！
それはそうと、俺たちは急いで食堂へ向かう。４日目の始まり。

第１４話～付き合ってる人たちを邪魔するのって結構面白い～（後書き）

如何でしたか？
まぁ…アレなんですが。そういうわけで、次回『第１５話～お願い誰か俺を助けてよ～』も、どうか、宜しくお願いします。

第１５話～お願い誰か俺を助けてよ～（前書き）

あらすじ。主人公は不能の恐れがある。
それでは、第１５話をどうぞ。

第１５話～お願い誰か俺を助けてよ～

ガヤガヤ　ザワザワ
普通過ぎる効果音、でも、それがもっとも最適な、今、この状況。
「世の中って、不平等だよなぁ…」
松永のぼやきは俺と久保に向けられたものであることは容易に想像がつく。
「松永、人間にはな、２種類あるらしい。格好いい奴と、その引き立て役のな」
今日はえらくテンションが低めの川口が松永を諭す。
「セーちゃん♪はい、あーんして、あーん」
…。羞恥心のない十代に水平チョップしたくなった。俺の立場を考えろ。藤本。
と、いうわけで、お隣の久保さんはというと…
「ねぇねぇ久保くぅ～ん、携帯のアド教えてよ～。アド」
昨日の告白騒動で一躍有名になった俺らの班と藤本の班。その件で久保の容姿の事と、藤本班との仲が前橋高の女子生徒たちに知れ渡り藤本班をパイプに、どうにか久保とコンタクトを取ろうという魂胆らしい（岡部談）。
当の本人である久保はというと、これだけの人数がいるのに、一人一人の顔をしっかり確認して「４２点、５６点…６１点、いや、５９点か？」ボソボソと小声で恒例の失礼な採点をしている。相変わらず不思議というか馬鹿というか…。
「ねぇ、俺のアドは聞かんの？」
松永が近くにいた女子に声をかける。
「うっさいわねぇ、あんたたちになんか興味ないの。私たちが欲しいのは久保君の情報なの！」
「…んだと？俺は関係ねぇだろうが。何が『あんたたち』だ。えぇ？俺がいつお前らに言い寄ったよ？この売女め。自意識過剰も大概

にしとくんだな」
川口が噴火した。今まで誰にもぶつけていなかった分のイライラをぶちまけた。ちょっとした八つ当たりなんだろうなぁ…。危ない危ない。
「な、何ですってぇー！？」
でも、まぁ、ここまで騒がしいのはちょっとなぁ…。
「セーちゃん、あーん」
こ、こっちもかっ！
「いや、だからな、もうちょっと周りというものをだな…」
「おい、田中」
藤本にちょっとした人間社会の摂理を説こうとしていると、低い声が横から割り込んできた。
声の主は…。上之保学園体育教師、剣道部顧問、剣道４段保持者。４３歳バツイチ。酒井久蔵。
「…何すか？先生」
くるっと酒井のほうを向き、ちょっと不機嫌に対応する。何故か不機嫌か、こいつは行事のたびに馬鹿ばかりやってる俺たちを妙に嫌っている節があるからだ。嫌われてる相手とは話したくないからちょっと不機嫌め。
「昨日の件だが。何だ、アレは。異性との交遊は禁じると校則にもあるだろうが」
「そですね、しかし、それと昨日の件に何の接点が？」
とぼけてみせる、藤本は、何も言わない。
「ふざけるなっ！」
ばちんっ！
強烈なビンタが俺の頬を打つ。
「・・・っ！！」
反射的に相手を睨み付けてしまう。
「何だその目はっ！」
ばちんっ！ばちんっ！

今度は二回、左右を一回ずつ。口の中を鉄の味が駆け巡る。これで、今まで抑えていた俺の頭の中の何かが飛んだ。
「ざけんなよ…。何だ、しつこく叩きやがって…。旧式の教科書通りの説教でよ、人の心を変えれると思ってんのかよ、先生。こりゃ、説教でも指導でもなく、ただのストレス解消なんじゃないんですか？」
「っ！」
酒井は顔を赤くする。逆効果なのは分かっていた。でも、言わなきゃ気がすまなかった。
どっ！
「がっ…っは…」
胸を穿つ一撃。この衝撃はビンタのそれとは違う。この野郎、いよいよ得物を抜きやがった。酒井の右腕に握られた、血の染みが見えてきそうな竹刀。
周りの視線が一気にこっちに注がれる。
「一つ。聞いておく。お前は、そこの女子と付き合っているのか？昨日、彼女へどう答えた？」
「くだらねぇ、そんなののために殴られたのかよ。俺は。誤解も甚だしいぜ。俺がいつ彼女と付き…付き合っているって…言ったよ。付き合ってる…わけが、ない」
途切れ途切れなのは藤本に対して後ろめたさがあるから。今、藤本のほうを向くことは許されない。あと少しでも、相手に確信をもたれたら駄目だ。藤本は、何も言わない。
「…。ほう、嘘だったら、容赦しないからな」
俺を殴って気が済んだのか、予想外にあっさりと去っていった。
「大丈夫か？セーダイ。って、大丈夫じゃないやんな…。口切ったか？口、開けてみ」
一番先に俺に駆け寄ってきたのは久保。叩かれて一時たつというのに赤みの取れない頬を見て久保が心配そうにする。藤本は、何も言わない。

口をあける前から分かっていたが、口の中はやはり、切っていた。口内炎にならないかちょっと心配だったが、他に外傷はないので放っておく。
「うがいしたほうが良いで。あと、せやな…。一応、バス子ちゃんとこに行っといた方がいいかもな。今日も、スキーはたぶん禁止になるやろうけど」
「…。マジでか…。つーか、俺はココに何しに来たんだよ…」
「修学旅行しに来たんだろ？」
松永が笑いをこらえながらそう言う。
「ここで話しとくのもなんだし、さっさと保健室行けば？」
「・・・。ん、そうだな…。ま、俺の分までスキー楽しめや」
ちょっと皮肉を込めてそう返す。くそぅ、何で俺ばっかりこんな目に。
「努力する…。楽しめるように、な。どうにも、そうできそうにはないが」
川口が眉間にシワを寄せてある一点を見る。俺もソッチを見る。なるほど。大変のは俺ばっかりじゃないようだ。
「んじゃっ！久保、頑張れよっ！」
速攻で逃げる。人の波に飲まれないように。自分のあらゆる身体能力を最大限に活かし、俺の件のほとぼりが冷めるのを今か今かと待ち構えていた久保に群がる女性陣を避ける、避ける、避ける。
・
・
・
女の海を抜け出て、医務室に行き着く。相当息を切らしている。医務室の前に見慣れた影が一つ。高見さん？否、藤本だった。
「…。何やってるんだ？こんなところで」
その人影に近づき、声をかけてみる。
「・・・」
藤本は、何も言わない。反応すらしない。こっちを見ない。声が聞

こえない。そんなことはない距離だ。
「おいっ！ゆっちゃんって！」
今度は大声で呼んでみる。
「……いで」
何か言ったのは聞こえた、しかし、あまりに小さい声で上手く聞き取れなかった。
「『ゆっちゃん』とか気安く呼ぶなって言ってるの」
「あ・・な、何を…言っ…ぅ」
あまりのショックに声が上手く出せない。口に猿ぐつわでもされた気分だ。頭の中が真っ白になり何も考えられない。
「理由？理由が聞きたい？」
普段の彼女とは違う、凄くさびしそうな彼女。
「う、あ、う…ぅん」
「とても、身勝手だったから。こういっておきましょうか。あとは田中君が、自分で考えて」
パタパタパタ…
彼女はそういうとその場から去っていった。少しずつ遠ざかっていくスリッパの音が凄く嫌だった。
いきなり、俺が、泣き出した。声にならない嗚咽を出し、俺が、泣き出した。
彼女が何故あんなことを言ったのか。それは、何となく分かる。多分、酒井との言いあいが関係しているのだろう。
でも、あそこで言った俺があそこでついた嘘は、自分以外にも、藤本を守ろうとしてついた嘘で、あの場では最善だと思ったから。俺が傷つくだけなら、あの場で公言しても良かったが、酒井が怒って藤本に危害が及んだら嫌だと判断したからだ。
ここまで自分を自分で弁解してはっと、思う。そんなやって、藤本をわからずやに仕立て上げ、藤本が悪いとして、自分を守ろうとする自分がいて、それに気づいて、またひどく泣き出した。今度は声が漏れる、大声になりそうだ。誰か、俺を、止めてください。

「あぁあああぁあああぁあああーっ！！」
医務室の前で、泣きじゃくった。大声で。廊下で反響する。大音量の泣き声。みっともなく、泣き崩れた。真っ白な頭には藤本の最後に残した酷く哀しそうな顔だけが残っていた。

第１５話～お願い誰か俺を助けてよ～（後書き）

如何でしたか？この辺から佳境（？）になってくるのですが…。次回『第１６話～小休止～』も、どうか貴方様の時間の都合が許す限り…。

第１６話～小休止～（前書き）

あらすじ。何かおかしなことになった。作者が。
そういうわけで、第１６話どうぞ。

第１６話～小休止～

・
・
・
場所は、医務室。
「…どうですか？落ち着きましたか？」
優しく、間延びした声。声の主は、高見さん。
「…。はい、もう、大丈夫…です。は、い」
昼ごろになって、俺はどうにか会話が可能なくらいには回復していた。
「…で、何があったのか説明…してもらえますか？」
ちょっとすまなそうに聞いてくる。
「・・・」
「あ！いや、そんな無理やり聞こうとしているのではなくてですねっ！？その、教えていただけたら嬉しいなぁなんて思っているだけでして、そんな無理していただかなくとも私にはそこまでして知る権利がないというかその…」
途中から上手く聞き取れなかった。と、いうか、聞く気をなくした。
「いや、話しますよ。高見さんに、聞いておきたい」
「ですからそんなデバガメ根性からではなくてっ！って…ありゃ？聞いて良いのですか？」
高見さんは心底驚いたような反応を見せる。
「良いから、さぁ、話しましょう…」
・
・
・
俺は数分使って彼女に今日の出来事を説明した。
「へぇ…。そんなことがあったのですか…」

関心があるのかないのか、微妙な反応を見せる高見さん。
「…。お腹、空きません？」
彼女は唐突に今までとはまったく違う話題を振る。
「…。はぁ、まぁ…」
俺は突然の話題に曖昧な返事。
「それじゃ、お昼にしましょう♪はい、どうぞ♪」
ずどんっ
目の前に凄く大きな何かが置かれた。いや、見た目はちゃんとした弁当なんだけども、量が半端じゃない。
「…。これは？」
「希望閣特製の職員弁当っ！」
元気よく答えられた。
「それ、ホントは私のなんですけど、あげますねっ！だから、それ食べて元気になってください、美味しいですよ～」
彼女なりの励ましだろうか。そう考えると、自分を励ましてくれる、高見結衣という存在に感謝し、嬉しくある反面、自分がとても情けなくなった。
「でも、こりゃちょっとなぁ…」
へへっと、苦笑する、俺。笑う元気も出てきたようだ。高見さん、彼女は本当に俺に元気を、くれる。自分が優柔不断だとは思いたくないが、ここまで優しくされるといけない事に藤本の影が薄らいでいく気がした。
ええい、考えるな。今は、小休止。飯食って体を落ち着けてから考えろ。
「ところで、これはもちろん二人で食べるんですよね？」
量が半端じゃないので当然そうだろうと付加疑問文で聞いてみる。
「私は自分で何か作りますんで、遠慮しないで全部食べちゃっていいですよ」
「・・・」
なるほど、彼女なりの気遣いかは知らないが…。こいつはちょいと

ヘヴィ過ぎる。性質の悪い冗談だ。でも、親切は素直に受け取ったほうがよろしかったりするわけで…。食う…のか？一人で？これを？と、ふと、今の時間が気になった。昼の…いつごろだろうか。聞いてみるとしよう。

「ところで、高見さん…」

「はい？なんでしょ…」

こちらを振り向き、返事をしようとした、その瞬間に重ねて…

ドムンッ！

不思議な効果音を上げ彼女の背後が爆破炎上する。

「んにゃー！何ですかこれー！？」

背後がいきなり爆発し気が気じゃない高見さん。

ゴシカァン！

鍋が降ってきた。それはもう、大変なネウロクオリティで。

「の〝ぉぉぉぉぉぉっ！な、なな…何事ですか～？」

貴女が何をやっていたのか俺のほうが聞きたいです、高見さん。不幸中の幸い、だった。それは宙を舞った鍋の中に沢山入っていたお湯が飛び散った火を都合よく消してくれて大惨事には至らなかった事だ。

・

・

・

事故の処理が終わり、彼女は再度料理に取り掛かっていた。香ばしい香りがし、今回は成功だな、と、何となくわかる。

「で、何か言おうとしてましたよね？田中君」

こちらを向き、彼女は思い出したかのごとく問う。

「いや、まぁ…」

過ぎたことだし、時間が気になると言えば気になるが…。と、返答に困っていると

ドンッ！

また鍋が弾けた。鍋に嫌われてるのかな、彼女。中身をぶちまけな

がらくるくると廻る鍋。ボーっと見つめる高見さんと、俺。
ガおン…ドチャチャ…
鍋が、高見さんの頭にすっぽりかぶさった。中に残った少ない具がつつーと彼女の顔を伝う。あ、シチューだったんだ。
「み゛ー！あ、熱い！熱いでしゅのぉぉぉぉぉぉっ！わっ！私が、私はっ！な、中が、中に、入って、熱いですぅ～！白いのが熱いぃぃー！」
「高見さん、台詞だけ聞くと微妙に卑猥ですから落ち着いてっ！落ち着いてー！」
「にゃにょにょにょにょ～！」
一度暴走した彼女は止まりそうにもなかった。解決は、時間に任せるとする。
・
・
・
「うぅ～、すみま…むぐむぐ…せん…。結局こういう…むぐむぐ…羽目になって…むひゅむひゅ…しまって…」
彼女はすまなそうに謝る。箸と口を動かしながら。
「あの～、食べるか謝るかどっちかに絞っていただければ対処もしやすいのですが…」
「あ、はい。それじゃあ…」
カチャカチャ…むぐむぐ…ごっくん…カチャカチャ…
・・・。食べるほう選んだよこの人。
「すみません、僕が悪かったです。前言撤回しますので何か喋って下さい」
「うふふ、最初からそうすればいいのです♪」
たいして強制力もないのにこの人には勝てる気がしないなぁ…。俺はもしかして結婚したら尻にしかれるタイプなのだろうか。まぁ、こんなことはまさに捕らぬ狸の何とやらだが。
この後は他愛もない話をして、時間を過ごす。

深夜に久保が言った言葉は、今の俺には毛ほども残っていなかった。

第１６話～小休止～（後書き）

如何でしたか？このあたりから作者の迷走っぷりが顕わになってくるわけですが…。次回『第１７話～はじめの一歩～』も貴方様の時間の都合が許す限り…。

第17話～はじめの一歩～（前書き）

あらすじ。高見さんは鍋に嫌われている。
それでは、どうぞ。

第17話～はじめの一歩～

ある程度、話のネタも尽きたところで
「ところで…」
俺は、話を切り出した。
「…」
言葉に詰まる。一度、事情は説明したのでこれ以上やるというのも何か…と、言う感じなのだ。
「ところで？」
高見さんが俺が言いやすいような展開を用意する。これは有難いような有難くないような…なのだが。
「その…何で、彼女は…藤本は、あんなことを言ったんでしょうか。高見さんは…わかりますか？どうしてか」
「・・・そう…ですねぇ」
彼女はそう言ってちょっと間を空ける。
「今ぱっと浮かんだ希望的な可能性は、２つあります」
「それで！どんな奴ですか！」
思わず、彼女の両肩を力いっぱい掴む。
「わわわ！ちょっとがっつかないで下さいよぉ！」
「どぁっ！すみません！」
パッと手を離す。高見さんは少し涙目になっていた。すみません、ホント…。
「グスッ。うぇ、うぇと…気を取り直して…。理由ですよ、想像される理由の中から希望が持てる可能性のある理由を述べるんですよ！今から！」
何か、ちょっと壊れ気味だ。この人。
「ムカついた。つい、カッとなったから」
「はえ？」
いきなりわけの分からない単語を述べた彼女に意表をつかれ、何か

変な声を上げてしまう。
「理由・イチ、です」
「ん？」
ちょっとわけが分からない。
「だ！か！ら！私が考えうる理由のひとつですって！自分と付き合ってるはずの田中君が先生に質問された途端いきなり付き合ってないなんていったからちょっとムッとしたのかな、ってことですよぶべ！」
彼女はあまりにもイライラしすぎてか、舌を思いっ切り噛んだ。
「でも！俺は自分の保身だけのために嘘をついたんじゃあっ…」
「んにゃにゃっ！分かっていても腹立つ時ってありますよ！ベロ痛い…グスッ」
「それで、理由2は？」
涙目で舌を口からデローっと出す高見さん。
「そうそう！理由・ニ、です！こいつが本命と思います。では行ってみようです！ジャカジャン！」
適当な効果音まで加わった。
「田中君に、これ以上被害が及ばないように。です」
いきなり、神妙な顔になり、高見さんはそういう。
「それは…どういう…」
「田中君は、ぼこぼこにされましたね？その…先生に。自分が無意味にべたべたしていたから、自分があんな大勢の目の前で告白したから、だから自分が田中君のもとを去った。とか」
「何でそんなことをっ！」
あまりの驚きで医務室のガラスをぶち割るような大声を上げる。
「うぅ～！私に言われても～なんですよ。そうかもな～って思ってるだけなんですよぉ」
はっと、我に返る。俺は、ちょっと話題を切り替える。過ぎたことはこれで解決としていい。今は、今後のことだ。
「それで…どういった…感じになりますか？」

彼女に、高見さんに、聞いてみる。彼女なら優しく、にこやかに答えてくれるだろうと思いながら。
「田中君は、私にどういう答えを望みますか？曖昧な慰めを私に求めますか？それとも…私の考えていることを一字一句違わず言って欲しいですか？」
彼女の口から出たのは、予想外の台詞だった。
俺が選ぶのは決まっている！決まっているじゃあないか！何を、躊躇する必要があるか。
「っ…」
固まる。喉元まで返事が出てるのに…。それ以上、言えない。俺は、どこまでも弱い奴だ。
「ほんじゃ、前者のほうで頼もか。こいつ、見た目はこうやけど肝は相当小さいからな」
真横から、声が聞こえる。男の声、中途半端な関西弁。
横を見ると、久保貴洋。彼がそこにいた。
「何でお前がここに！」
月並みだが、思わず出てしまうこの台詞。
「ん？助っ人。助っ人や」
にっと笑ってみせる久保。こいつ、世話焼きなのはいいとして、優しいのか自分が楽しみたいだけなのか分からないぞ…。
「んじゃ、俺は出るわ。部屋に戻っとくから」
「ん？お前、スキーは？」
「外見てみ。雪や雪。大雪」
今まで、全然気づかなかった。あいつが言うまで。
ガラッ　ピシャン
戸を自分の体分だけ開け、通り過ぎ、戸を閉める。
「それで…田中君は、どっちを選びますか？」
「後の、ほうでお願いします」
久保のおかげで、あいつが乱入してくれたおかげで多少気分が軽くなった。計算してるとしたらあいつは凄いやつだよなぁ…。

「いいんですね？それで」
「はい、構いません」
俺は即答した。彼女の問いに。
今の俺なら、どんな言葉にでも、態度にでも耐えられる。藤本との関係を、元に戻すためになら。彼女の心の底からの笑顔をもう一度みたい。彼女の心の底から恥ずかしがる顔をもう一度みたい。
いや、もう一度、じゃない。二度と切らしたくない。何億回何兆回と見てやる。だから、これはそのための第一歩だ。

第１７話～はじめの一歩～（後書き）

如何でしたか？やっぱり、私は暗い・シリアスなものは書けないので、こういう馬鹿みたいな展開になるのですが…。
次回『第１８話～交錯する時間、ココロ～』もどうか、貴方様の時間の都合が許す限りお願いします。

第１８話～交錯する時間、ココロ～（前書き）

あらすじ。久保は神出鬼没。
それでは、どうぞ。

第１８話～交錯する時間、ココロ～

４日目、１５時２８分。正面玄関。
「ふゅぅ…。やりすぎたよ」
私、藤本優はいきなりの豪雪でスキーが中止になったので用具を片付け、とぼとぼと一人で歩きながらちょっと後悔していた。セーちゃんのためとは言え、あそこまで言ってしまったから。
「ふぅーじっ子！何してんのー？」
ばん！
力いっぱいの衝撃。私はちょっと、よろける。
犯人は言わずもがな、岡部麻衣その人だった。
「何ぃ？おっちゃん。いきなり後ろから叩いてぇ…。痛いよぉ～」
「ん～？元気なくとぼとぼ死人のように歩いていたから元気付けてやろーかなと思ったのさ。不必要だった？余計なお世話って奴でした？」
おどけてみせる彼女。う～ん、今はちょっとした反省タイムなんだけどなぁ…。
「ん～にゃ、全然だよ？どこが死人？」
「元気がない！」
コンマ単位で否定されたんだけど…。
「さ、どうしたの？田中がボコされたことで？何なら私があのオヤジぶっ飛ばしてくるけど？」
「あ、あぁ～！そんなんじゃないの！大丈夫だから、ほら。ね？ね？」
頬に指を当て、にっこりと笑顔を作る。嘘っぽいなぁ…この行動…。
「…。うそ臭いなぁ…。まぁ、そういうことにしといてやるけど…ね！」
どんっ
「元気出せ若者ぉっ！」

私の背中を思い切り叩き、きゃっきゃと笑いながら、走り去っていく。・・・。と、くるっと、こっちを向いた。
「そういえば、田中は医務室にいたよん。ま、私の独り言だけど、さ。んじゃーねー」
彼女は大声でそう叫ぶと、ぐっとこっちに親指を立て、健闘を祈る！と、元気いっぱいの笑顔で私に向かって笑う。
「そーんなんじゃないってばー！」
私も大声で叫ぶように返答する。彼女の姿が見えなくなってから、私の足は自然と医務室へ向かっていった。
・
・
・
同時刻、医務室。
「ま、あんなに脅した割にはたいしたことじゃないんですけどね」
高見さんの拍子抜けする一言。
思わず、その場でちょっとこけそうになる。
「それじゃ、まぁ、言いますよ」
「は、はぁ…」
一度狂った調子というものは戻りにくい。お世辞でも格好いいとは言えない間の抜けた返事。
「理由イチに対する私の見解ですが、まぁ、これだと比較的楽勝でしょうね。と、いいますか、一番楽でしょう」
「と、いうとどういう事っすか？」
いまいち、ピンとこないわけだが。
「つまり、です。これの場合、解決法を挙げるとしたら…。信頼取り戻せばいいわけです。うん、単純」
「・・・」
確かに単純だが、時間がかかるんじゃないのか？かなり。
「理由ニに関しては、厳しいですね…。こっちが愛情を向けると向こうの決心がどんどん固まっていってしまいますから」

「そうですか…。で、それでその場合はどうすればっ！」
「ニャッ！だから、がっつくのやめてくださいってぇ！」
ついついあせって、大声になる。高見さんが声だけで半泣きになる。
「そうですね…。向こうの覚悟が固まる前に、ぶち壊すしかないでしょう」
ぽこ、高見さんは壁を殴り、壊すジェスチャーをする。
「・・・」
別に高見さんの凄まじい超・幼稚園児級のハードパンチャーぶりに驚いているわけではなく、高見さんの持論が凄いことになってるからだ。
正直、そんな単純にいけるとは思わない。が、俺にはそんなことを気にしている権利すらない。やらなければいけない。どんなに可能性が低くても、だ。
「しかし、どうやってぶち壊すんですか？」
方法が思いつかない。
「人に頼るのはいいことだけど頼りすぎはためになりませんよ？」
それでも…聞いておきたい。
「私なら告白です！」
ビッ！右の人差し指をピシッと立てる。
「・・・。なるほど…ねぇ…」
あいまいな返事だが、気持ちは固まっている。やるしかない。
「私は、ここまでですよ？あとは田中君がどうにかしなきゃいけないんですから」
高見さんからの激励を受ける。
「・・・。俺、自信…ないですよ」
つい、漏れる弱音。
「そうやって、いつまでも甘えるんですか？」
ちくり。胸に、刺さる一言。
「でもっ！でも！俺は…こんなに自信がないのって！そんなの、初めてなんですよ…。ホント」

自分で言っていて、情けないと感じる。自分で言っていて、腹が立ってくる。何て情けない奴だ。俺は。
「…。なら、私に何を求めるんですか？正直、私がこれ以上何かできそうにはないんですけど…。嫌味とか抜きで」
・・・確かに。そうだよなぁ…。情けないなぁ、俺。
「それなら、せめて練習とか…」
「練習？ですか？」
はてな、という顔をする。自分で言っておいてだが、俺もちょっとはてな、なのだが。
「その…ですね。少しでいいから自信が…欲しいんです。ですから、ちょっと高見さんに向かって、言わせて頂けないでしょうか？」
人間、弱気になると言葉遣いまで弱くなるものだ。ちなみに、こんな台詞、自分で言っていて吐き気がする。
「そんなことしなきゃ告白も出来ないなんて、それなら止めてしまいなさい！って、言いたいところですが…。つくづく、甘いです。私は」
「それじゃあ…」
了承してくれるとは思わなかった。
「何を隠そう、私は告白したこともされたこともないですから、どんな感じか気になるというのもあります」
くすっと笑ってみせる、可愛くも優美な大人と子供の中間の笑み。
「そ、それでは…」
ごくっと生唾を飲み込む。どくん、どくん。徐々に心拍数が上がっていく。
「そ、その…俺は…君が、好き、です。だから、付き合ってくれま…せんか？」
がしゃっ
ぱたっ
パタパタパタッ！
ドアが閉まり、外で走り抜けるスリッパの音がした。恥ずかしくて

俯いていた顔を上げてみると、高見さんがしまったという顔をしていた。
「ど…どうしたんですか？」
声が震える。想像出来得る最悪の展開を頭に思い描く。ぞっとした。
まさか…
「聞かれて、しまいました」
最悪の展開、その色がどんどん濃くなっていく。
「だ、だれ…に？」
呼吸が…止まる。数秒間。彼女の答えを聞くまで。
「その…藤本、さんです」
俺の中の、何かが…決定的にクルった音がした…。

第１８話～交錯する時間、ココロ～（後書き）

如何でしたか？ホントね、私の迷走が止まらないわけですが…。
次回『第１９話～始動。プロジェクトＫ～』もどうか、貴方様の時間の都合の許す限り…。

第１９話～始動。プロジェクトＫ～（前書き）

あらすじ。雲行きが怪しくなってきた。作者の。
そういうわけで、どうぞ。

第１９話～始動。プロジェクトＫ～

マズイ。マズイ。マズイマズイマズイ…。
汗が止まらない。冷や汗が。だらりだらりと、だくだくと。滝のように。バケツいっぱいの水をひっくり返したように。
思考回路強制終了、ダウン、エマージェンシー、緊急事態。ＷＡＲＮＩＮＧ、危険、ＤＡＮＧＥＲ…。
頭が回らない。
似たような意味の単語ばかりが頭をよぎる。しかも、くだらない。
必要のない単語ばかり。
ピーッ脳内アナウンス、この脳は応答していません。深刻なエラーが発生しています。一度、人生をリセットすることをオススメシマス。
ドウシヨウドウシヨウ
「と、田中君！早く、行って下さい！」
ドウシヨウドウシヨウ
「田中君！」
高見さんの声でハッ、とする。
そうだ、混乱する前にやらなきゃいけないことが…ある。ありすぎる。
混乱なんてくだらないことは余裕のあるときにでもやってろ。今は何が第一か。決まっている。
「さぁ、早く彼女のところに行って、誤解を解いてきてください。あと、迫力ありましたよ♪」
ニッコリ笑う高見さん。ありがとう、その笑みで少し、救われる。
少し、冷静になれる。
まず、彼女の、藤本のところへ行って誤解を解こう。すべてはそれからだ。決着を始めなければ。
「迫力あれど、心ここにあらず…失恋っぽいなぁ…」

誰にも聞こえない声で、高見さんはそういった。走り去った俺にはもちろんのこと聞こえない。

・

・

・

コンコン

戸をノックする。その部屋は5人部屋。

小学校からの知り合いの藤本優、岡部麻衣のいる部屋。残り三人は小学校のころは知らなかった人たち。

ガチャッ

戸が、少し開いた。そのわずかに開いた隙間から見えるものは…ドアと壁を結ぶチェーンと、大きな瞳。その瞳には覚えがある。まず間違いなく藤本のそれだ。

「何の用ですか？」

他人行儀な口調、不快感を露骨に表している声のトーン。ピリ、と空気が張り詰める。

「その…さっきのは…」

「さっきって、いつ？」

俺がコンマ単位でもどもると彼女がすかさず口を挟む。

「その、医務室で…」

「…。で、それが？それで？」

二度の疑問系が俺の心に強く刺さる。

「その、お前に言いたかったんだよ。高見さんにはその練習として付き合ってもらって…」

「知ってたよ」

彼女は俺の台詞の途中に割り込み言う。

「だから、ムカつく」

「…」

何も、いえない。知っていたのなら、知っていてこうして怒っているのなら俺はもう手詰まりだ。

「馬鹿じゃないの？ホントさ」
「ッ！…？」
彼女の発言にびくッとしたものの、いまいち意味が分からなかった。
「セーちゃんさ、酷い。ホント。考えなかったの？高見さんの気持ち」
「高見さんの…？」
俺の呼び名が『セーちゃん』に戻っているあたり、普通の藤本になったのだろうか。
「高見さんね、セーちゃんのことを好きだったと思うよ。きっと。…いや、絶対」
彼女は続ける。
「そんな人に、告白の練習とかわけの分からないことしてさ…。ホント、信じられないよ…。気づかなかったとかそういう問題じゃないよ」
・・・。何もいえなかった。確かに、俺は何て馬鹿だ。なんて無神経だ。信じられない。本当に。
「私にさ、謝りに来る前に高見さんに少しは謝っといた？感謝しといた？してないでしょ？最低だよ。そんな人に何言われても何にも感じないから。じゃ」
バタン
ガチャッ
ドアが閉まり、鍵がかかる。
俺はいっとき、その場から一歩も動けなかった。
・
・
・
同日、午後６時２０分。宴会場。
カチャカチャカチャッ
食器が鳴る。プラスチック製の箸が当たり、カチャカチャッと鳴る。
和気藹々とした話し声も所々から聞こえ、集まって大声の雑音と化

す。
そんな中、あるひとつの空間は静かだった。
カチャッカチャッ
食器の音だけ。たまに聞こえる妙な関西弁と、乱暴な女性の声。その二つとも空気に呑まれ、消えていく。
「ゴボッ！」
隣で大声。この変な関西弁は…。
「いやぁ、あまりに退屈やったから食べながらうとうとしてしもうたわ。な、喋ろで。セーダイ」
「・・・・」
ごめん、お前のしたいことは分かるしそれに対してありがとうとも思うけど、答えることは出来ない…。
「・・・・ふぅ」
久保はこっちの顔を見て、ため息をつき重症やなとつぶやき、食事に戻る。本当にすまない。
・
・
・
同日、午後９時１２分。４０６号室。集合人数、久保貴洋・川口明彦・松永大輔・岡部麻衣。総勢４名。
俺、久保貴洋はある事を考えた。どうすればこの腐った空間を打破できるか。
ガチャッ
ドアが開く。
ドドドッと勢いよく走ってくる浴衣で湯気の出ているの女性。風呂上りやろうか？
「すみません！遅れましたぁッ！」
彼女の正体は、高見結衣。その人だった。
ドゴッ
脳天から床に豪快にダイブ。

彼女は走ってきた勢いでくりっと頭で逆立ちし、首がスプリング代わりに体を押し出し、ばよーんと空中をさ迷った挙句、胴体着陸をした。
ドジッ娘とかそういう問題じゃない。レベルじゃない。最早人間の域を超えてる気がする。
「痛くないですしッ！！」
瞬時に飛び起き、何故かムキになるバス子ちゃん。おもろいしかわえぇけど、何やろか、この意味不明さは。
「誰にムキになってんですか。バス子ちゃん」
川口がちょっと冷ややかな目で聞く。
「ムキになってないですしッ！！わけわかんないしッ！！」
何か新手のクスリでもキメてしもうたんやろか？テンションがいつもとはまったく別モンなんやけど…。
「おっと、それはそうと…これで全員か？」
川口が俺に聞く。
「あぁ…メインがおらんが…。まぁ、支障はない。あいつは状況に流されるタイプやから。ついでにぶっつけ本番にやたら強い」
「「「確かに」」」
岡部ちゃん・川口・松永が同意する。
「藤本さんもいないけど？」
今度は松永が俺に聞く。
「あの人入れたら意味ない計画なんやって」
「？」
いまいちピンと来とらんな、松永の奴。ほかの奴は大体判っているって言うのに…このド低脳め。
あ、バス子ちゃんわかってるんやろか？…うわ、びみょ～やな、考えてみれば。わかっとらんかも知れん。
「ま、えぇわ。とにかく…始めよっか」
久保貴洋、友人のための一世一代のプチ計画を始めるとするか。

第１９話～始動。プロジェクトＫ～（後書き）

如何でしたか？相も変わらずおちゃらけ体質が抜けないのですが…。
それでは次回『第２０話～最悪のカタチ～』も貴方様の時間の都合の許す限り…。

第２０話～最悪のカタチ～（前書き）

あらすじ。高見さんはドジッ娘スキルを身につけた。元から？
そういうわけで…第２０話どうぞ。

第２０話～最悪のカタチ～

４日目。午後９時２８分。３／２階段。
俺、田中聖大はお土産を買いに、売店のある１階へ下る最中、何か、嫌な感じを受けた。
虫の報せ、という奴だろうか？何か、ゾッとした。
３階といえば、藤本の部屋のあるところだ。気になる…が、俺には…行く資格はない…だろう。
高見さんに謝りはしたものの、それは心からではなかったし、もしかしたらすまないという気持ちより藤本のご機嫌伺いのほうが強かったかもしれない。
その高見さんは、ちょっと意地悪な顔をしたものの、ニッコリ笑って気にしてないですよ、そう言って俺の肩を軽くぽんと叩いた。
俺は、３階から２階の丁度中間で立ち尽くした。

・
・
・

同時刻、３０５号室。
私、藤本優は自分の部屋で一人、泣いていた。声を殺し、泣いていた。
自分から、ぶっ放しでフッておいて泣くなんて身勝手極まりない、かもしれない。でも、泣くのは仕方ない…。涙が出るのは仕方がない。

トン…トン

ドアを、ノックする音。
誰？おっちゃんたちなら、普通に入ってくるだろうし…。
なら、誰？セー…ちゃん？

そんなわけ、ないよね。でも、その可能性に…すがりたい。やっぱり仲直りしたいよ…私。
カチャ…リ
ゆっくり、ドアを開ける。誰だろう。セーちゃんだったら、いいな。
ドアの向こうには、男の人が…3人いた。
セーちゃんじゃ…なかった…。
知ってる。顔も、名前も。同じクラスだから…。何しに、来たんだろ？
「上之保の奴と別れたんだって？昨日告白したばかりなのに早いねぇ、何があったの？」
男子の一人がニヤニヤした顔で馴れ馴れしく、私に聞いてきた。正直、本当に腹が立つ。
「別に、関係ないでしょ…。君には。冷やかしなら…」
私はそう言いながらドアを閉めようとノブを握り、こちらに引き寄せようとする。
ガッ
しかし、大きな手が閉まりかけのドアを押さえる。男子たちはドアを閉めることを許さなかった。
「傷ついてるねぇ…。俺たちが、慰めてやろうか？」
男子全員がニヤッと、いやらしい笑みを浮かべる。私の本能はアブナイと警報を鳴らした。だが、もう、遅かった。
ドカッ
彼の前蹴りがみぞおちあたりに響く。私は思い切りしりもちをつき、腹を押さえうずくまる。
彼らはドアを思い切り開き、ドカドカと部屋に入る。
「おい、金田。お前は外見張ってろ」
「あ？俺にもヤらせろよ」
「お前にはあとでヤらせてやるって」
「ちっ、早くしろよ」
私の耳がおかしくなったようだ、ゾッとするような単語が聞こえた。

自然と…カチカチカチ…歯が鳴る。
本当の恐怖に直面すると、恐怖もある一線を越えると、口元が歪み、笑みがこぼれる。
馬鹿らしい…馬鹿らしい…何が？ナニモカモガ
もう無理だ…もう無理だ…何が？ナニモカモガ
目から涙、口には笑みを。声は出ず、呼吸も意識しないと出来ない。
セーちゃんに酷いことといったからかな…罰が当たったのかな…ごめん、ごめんね…セーちゃん。
・
・
・
また、ゾッとする感覚が俺の体を襲う。
それと同時に、思い出す。久保の台詞を。
『幸せな恋人たち。怒り、叫ぶ黒髪の長身の青年。泣き崩れ、格好もボロボロの少女』
それを思い出して、更にゾッとした。もしかしたら、今か？今、その状況なのか？
くそっ！
勘違いならそれに越したことはない、だが、もし…もし、勘違いじゃないのなら…。とにかく、行かなければ！
パタパタパタパタッ
バタッ
スリッパが脱げて、よろけて、階段ですねを勢いよく打つ。スリッパを拾う時間も惜しい。
痛い、だが、今は気にしていい場合じゃない。気にするな。今はすべての痛覚神経を断ち切れッ！
ハァッハァッ
階段を上り、階段側から比較的奥側にある３０５号室が見えた。
男が一人、立っている。何だ、何だ。キサマはッ！
「おい、お前、何…やってるんだ」

パタパタ
片足スリッパを履いていないから、床のべたつきに少し引っかかる。
「お前こそ、何だよ。元彼君？」
向こうは、余裕っぽくニヤっと笑ってみせる。しかし、その後ろにある動揺が今の俺には見える。
「っ！…っ」
声が聞こえた。聞き間違うはずがない。あの声は、藤本優。もう一回言うが、聞き間違うはずがないのだ。
今の俺は、ニュータイプか名探偵かのどちらかのようだ。
「中で、何やってるんだ」
「別に？さっさと自分の部屋にもどれよ。元彼はさ」
ブチッ
完全に何かが切れた。
「埒があかん…」
俺のつぶやきに、向こうは変な顔をする。
スウッと息を吸い込み、時間を確認する。
「上之保学園高等部２年Ｈ組！！出席番号１６番！田中聖大！！１１月２４日！！午後９時３１分をもって上之保学園高等部バスケットボール部を退部いたします！！」
一生でもう二度と出せない大声を放つ。
「バスケ部顧問佐竹浩二、ただ今田中聖大の退部を了承したぁッ！！思う存分暴れて来いッ！！」
向こうも俺に匹敵する大声で答える。…暴れて来いって…ことは、わかってるのか。ケッ、ふざけた奴だ。分かってるなら止めにきやがれ。
有難う、先生。
「そういうことで、暴力行為がばれても出場停止はないわけだ」
トトッ
軽く駆ける俺。
「ちょっ…俺を殴ったら退がｋ…」

ゴッ
容赦なしに一撃を加える。人中に一発。相手は思い切り３０５号室のドアに頭をぶつけた。
周りの部屋がざわざわしだした。中の奴も恐らくあわてているだろう。だが、逃すか。俺が退学になろうとかまわない。
ガコォン！！
閉まっているドアを思い切り蹴りあける。古いドアなので壊れることなくドアは開いた。
ドアを開けると、ジャージを肩辺りまで裂かれた藤本と、男が三人いた。
「「「何だお前はぁ！！」」」
男が三人、声をそろえて月並みな台詞をはく。
「正義の味方だッ！！」
ドッ
ドア前にいた男に一発。こいつも一撃で倒す。
藤本の目の前にいるのは中々にガタイのよろしい奴だ。
だが、今の俺は殊更に無敵な自信がある。
ガギッ
相手のあごに正確に一撃を加える。
よろけた相手の腹を思い切り蹴飛ばし、床にしりもちをつかせる。
「て、ってっめっ！！」
男は慌てて反撃をしようとするが、今の俺にはそんなものは赤子の抵抗に等しい。
俺はその男にあっという間に馬乗りになり、まず一発、顔面にぶち込む。
彼はひっとおびえた声、おびえた表情をするが、俺には全然気にならない。
ドッドッドッドッドッ
執拗に顔を殴りつける。ほかの二人の男は唖然としていまいちこの状況を理解していないようだ。

「も、もう…やめ」
血と涙でぐちゃぐちゃになりながら彼は必死に許しを請う。
「お前が死んだらやめてやるよ」
無意識に無感動な声が漏れる。
とどめ、俺はそんな感じで拳を振りかざす
と、そこへ前橋高校の教師が３０５号室に入ってくる。
久保たちもコンマ遅れで入ってくる。状況をいち早く察知した久保は真っ先に俺の振りかぶった右手を押さえる。
「これ以上やったら病院送りやぞ！やめろ！」
「うるせぇ！こんな奴ら来世が訪れないように殺すべきだ！離せッ！離せ久保ぉぉおぉっ！！」
俺の叫びがこだまする。
・
・
・
午後１１時丁度。４０６号室。
不思議と、大して咎められることはなかった。
多分、佐竹先生がカバーしてくれたんだろうが。
「夢どおりに…なっちまったか…」
ドン
久保が思い切り壁に頭をぶつける。
「あぁ…そうだな」
俺は心底落ち込んでいた。怒りを通り越して、落ち込んでいた。
「それじゃ…私は部屋に戻るわ」
「え、私も…」
藤本が岡部につられて立ち上がる。
「あんたは、来なくて…いい」
ぐっと、藤本の方を抑え、座りなおさせる。
「でも…」
藤本がぐずる。

「そうだ！藤本さん！私と寝よッ！！」
そう切り出したのは高見さんだった。
「いや～、私一人でいるとあまり眠れないのよ～。今夜だけ、お願い！ね？」
高見さんはそう提案する。
藤本には事件現場の岡部たちの部屋はもちろん、男しかいないこの部屋も恐怖だろうから、その点を考えるとかなりベストな提案だと思う。
「…うん。高見さん、ありがと」
藤本はぽろぽろと涙を流しながら立ち上がる。
「いえいえ、むしろ私が感謝したいくらいですから♪それじゃあ、田中君たちも、お休みなさい」
４日目の夜は、こうして終わる。
明日に、希望はあるのだろうか…。そんな変なことを呟きながら俺は瞳を閉じた。

第２０話～最悪のカタチ～（後書き）

如何でしたか？とうとう２０話到達です。
次回『第２１話～作戦決行～』も貴方様の時間の都合の許す限り…。

第２１話～作戦決行～（前書き）

あらすじ。４日目終了。
それでは、どうぞ。

第２１話～作戦決行～

ワッという歓声が聞こえたかと思うと…

・

・

・

目が…覚めた。

ただ今、１１月２５日。修学旅行５日目。すなわち最終日。

昨日アレだけ暴れたのに、外は静かで、拳の痛みもない。

だが、この部屋は…騒がしかった。

「マジでやるって言っとるやろうが！！何度も言わせんなこのハゲ！」

「禿げるかぁッ！この似非関西人！」

「何やとぉ！？てめぇ俺の『あいでんててー』にいちゃもん付ける気か！」

「何が『あいでんててー』だ！いちいち『　』つけて強調してんじゃねぇ！！」

久保と松永が朝っぱらから弾けていた。お前ら何やってるんだ。

「ん、あ、セーダイ。起きたか」

川口がいち早く反応。

「この騒ぎで起きないはずもないけどな」

苦笑で返す。

「ま、それもそうか」

川口も苦笑で返す。あぁ、こいつはまともな奴だ。

「セーダイ、起きたんか。早よ準備しとったほうがいいぞ。２時に出るらしいから」

スケジュールが俺にゆっくりする暇を与えない。横からの似非関西弁でスケジュールを思い出す。

「結局スキーほとんどやってないんだが…気のせいか？」

ちょっと、自分の不幸さを嘆いてみる。
「気のせい気のせい。ほら、布団たため。さっさと朝食行くぞ」
久保がさらりと流す。くそ、なんて嫌な奴だ。と、そこで気づく。
「アレ？久保、お前その髪型…」
いつもの適当な髪型じゃなく、ワックスでしっかり手入れされてあった。その髪型は何度か見たことがある。確か、小さいころに。
「ま、ちょっとしたジンクスや。この髪型にして負けたことってないんやって」
ぼさぼさの髪を触りながら自慢してみせる。
「ちょっと待て、この前の大会、決勝まで行ったのに何でそのジンクス使わなかったんだ？」
松永のちょっとした疑問。
「セットする時間、なかってん♪」
「死ねッ！」
そして、松永の蹴り。
「ジンクスに頼んなや、ボケが！」
久保が逆切れした。
それにしても、あの歓声は…夢だったのか現実だったのか。
・
・
・
「結局、小柳ちゃんが話にほとんど絡んでこなかった件」
朝食中に久保がそんなことを言ってくる。
「人気がなかったからだろ」
「坊やだからさ」
二つの異なった意見が飛び出る。
「いや、坊やじゃないやろ」
「認めたくないものだな、若さゆえの過ちというのは」
久保の突込みにもさらりと対応するシャア…じゃなくて、川口。
朝一に思ったことを撤回しよう。川口もまともじゃなかった。ここ

5年間近く、こいつと俺はまともだと思っていたんだがなぁ…。
久保は第一印象から終わってたけど。
それはそうと、今日は俺たちの班だけで食事をしている。何故か、
それはやはり俺を気遣っての行動だろう。
朝食・昼食は何事もなく終わり、事実上、俺の強制結婚のタイムリミットも刻一刻と近づいていった…。
・
・
・
スキーの閉校式もあっさり終わり、最後に旅館への挨拶は放送部員が勝手に終わらせてくれた。
バスに乗り込むとき、小柳とふと、目が合った。
「また来てねー♪」
元気な言葉、それから一息置いて
「最後まで諦めるなよー！ちくしょーッ！！」
彼女の声が一段と大きくなった。その言葉は、俺たち全員に言ったことだろうか、それとも…。
俺はニッコリ笑い返し、バスに乗り込む。
どたばたした4泊5日の修学旅行も…もう、終わり。
やはり、従兄弟との結婚は運命なのか…。そいつは何とも…残念なことだ。
そう思う気持ちとはまったく別の意味で
ため息が出る。
そのため息の意味は知っている。知っているのだけども…行動には…無理だ。
バスに乗り込み、窓を開け、真っ白の雪が覆いつくす雪面に、白い息を…吐く。
久保に冷たいから閉めろと言われるが、あっさりシカトして雪面を眺める。
ふと、意識を持って首を少し上に向ける。そこには…前橋高校2年

６組のバスがあった。
藤本を見つけようと努力するが、向こうの窓に水蒸気が張っていて分からない。
バスを見ていると精神的にちょっと辛くなってきたので、ぴしゃんと窓を閉める。久保から閉めるのが遅すぎると軽く殴られた。
・
・
・
今、Ｃ組を乗せたバスが出発した。
前橋高校のバスは一台もまだ動かないところを見ると、俺たちが全部出てから出発するようだ。
メルメルメル
横からメール独自の効果音。久保が携帯でメールを打っていた。携帯の持込は校則で禁止されているはずだが…。勇気のある奴だ。
画面を何となく見てしまった。
画面に映った文面はたった四文字

『作戦決行』

第２１話～作戦決行～（後書き）

如何でしたか？どうにかもうすぐ終わりそうです…。
ただ、結末を急いだ分色々と…。
次回『第２２話～乾坤一擲～』も貴方様の時間の都合の許す限り…。

第２２話～乾坤一擲～（前書き）

あらすじ。確実におかしな方向へと進んでる気がする。
んでは、もうすぐ終わりです。あと少しだけお付き合いください。

第２２話～乾坤一擲～

♪ラウスラデーラギポンデリルカ　ニョキニョキ（ニョキニョキ）♪
前のほうで着うたが聞こえる。高見さんが携帯を取り出し「失礼しました」と苦笑し、そのあとに別の笑みをにやっと浮かべる。
Ｄ組が出発した。
行きはここでエンジンがかかった。
が、かからない。エンジントラブルでも起こったのだろうか？
「鍵が…」
運転手さんの独り言の呟きが、マイクで超巨大化され俺たちの耳に入る。
どうやら、鍵がないらしい。
「ＳＴＥＰ１、成功です♪」
高見さんの声が運転手さんとは別のマイクを通して聞こえる。何を言っているんだ、この人は。俺も含め、皆が戸惑う。
川口と松永、それに久保の３人を除いたら、の話だが。
「どういうことですか？」
ウチの担任が聞く。
「こーゆーことです♪」
チャラッと、鍵を見せる。それは間違いなく、バスの鍵だった。
「ちょっと、返してください！」
運転手さんが大声＋マイクで高見さんに言う。
「やーで～すよ～♪」
ぴょいっと、彼女は外に出る。
外から、別のおっさんの声。。
「ちょっとガイドさん、何のつもりですか？」
高見さんの眼前に木刀を持ったヤツがいた。体育教師、酒井。
「鍵を、さっさと返してもらえませんかね？」
「何度も言わせないでください！やーです！！」

いけない、あいつは…女性であろうと容赦なしに手を出す！あいつに刃向かったらそれこそ…
酒井が木刀を高見さんに向けて振り下ろそうとした、そのとき
高見さんの前に出来た、一つの壁。
壁は…久保だった。いつの間にか、俺の隣から消えている。
木刀を右腕で受け止める。普通なら右腕が壊れる動作だが、あっさり木刀を振り払い、酒井の前に立つ。
久保は唖然とする酒井の鼻先に人差し指を指し
「昨日のようにはいかねぇぜ、クソジジイ」
えらく格好よく決める。
「行け、セーダイ」
いきなり、大声で久保に言われる。意味は、分かる。だが、いまさら行って何になるって言うんだ、もう、終わったんだよ。
「さ、田中君。ラストチャンスです！今から、今から彼女のところへ行ってください！」
「で、でも…」
「早く！藤本さんのところにいって思いを！少しぐらい足掻きなさい！！好きなんでしょうが！！」
ハッとする。
バスの窓を開け、雪面へ飛び降りる。
「…。あは…」
口元から何故か笑みがこぼれる。ちょっと…息を吸って…。
「本当に…本当にありがとうございます！！『ありがとう』じゃ足りないくらい、感謝してますので！！」
酒井と向き合ったまま、す…と手だけ上げて答える久保。帰りに何か奢って下さいねと笑顔で答える高見さん。
最後の最後まで、すみません。高見さん。ここんとこ、お前に助けられっぱなしだな、久保。
前橋高校２年６組を乗せたバスのほうを直視する。行ってやる、やってやるぞ！

俺は高速でバスに向かって走る。
と、そこで目の前にぞろぞろと、まだ出発していない教師が出てくる。上之保体育教師オールスターズ１２名のうち、７名が残っていた。
「ここは俺らが食い止める、さっさと行けよ」
川口がにやっと笑ってみせる。プラスいつの間にかバスから降りている２年Ｈ組の４２名（久保・俺・川口を除く）。
「お前ら、俺たちに手を出したら停学どころか退学だぞ？」
「そしたら、ＰＴＡにここの教育体制を内部告発してやるよ」
「まぁ、たかだか４５人。そんな脅しを使う必要もないでしょう」
「そうそう、拳で語ろうぜ、センセ♪」
多くの雑音の中、数人が会話を交わす。
どうなるか、ってところだ。数的には俺たちが有利だが…。
「おっと、俺らはサシでやらせてもらうぜ」
「自分からそんなことを言ってあとで助けを呼びたくなっても知らんぞ」
久保と酒井はすでに戦闘体制に入っている。久保が気がつけば標準語になっている、極度の興奮状態のようだ。
「そうだ、久保…。剣道三倍段って言葉、知ってるよな？」
「知ってますよ、こういう意味でしょ？その棒切れがなけりゃああんたはただのおっさんだって意味」
「ほぉ…、なかなkッ！」
台詞の途中で、酒井の声が途切れる。原因は久保の顔面への拳。
「久保、キサマ…。不意打ちとは…」
「不意打ち？ストリートファイトで何言ってるんですか？先手必勝は常識でしょう？嫌だなぁ、まるで僕が悪役みたいじゃない…かッ！」
腹を押さえる酒井相手に久保は手を休めない。しっかりと頭をホールドし、膝を執拗に叩き込む。
それを見て、皆一斉にワッとテンションがあがる。教員生徒問わず

「あいつら…ただ積年の恨み晴らしたいだけだろ…絶対」
俺はひとりごちながら目前へと迫ったバスのほうへ目をやると
「振られたくせに未練がましいぞ！キサマ！！藤本さんは俺たちのものだ！」
目の前にいる男子、その数は実に十数人。その全員が鉢巻を巻き、その鉢巻には『藤本ＬＯＶＥ』の文字。頭が痛くなった。
「ちょっと待てお前ら。めちゃくちゃ痛いぞ。退いてくれ…ホント…って、ぬぁっ！？」
「覚悟ーッ！！」
掛け声とともに何かを振り下ろしてくる。何かとは、避けたあとに分ったが、角材。
「うひぃ～、ばっ！危ないわ、アホォッ！」
「大丈夫大丈夫、ちょっと大怪我するだけだから」
「大怪我をちょっとで済ますなぁっ！」
ガズッ
別の方向からの攻撃。瞬間的に反応してくれたおかげで直撃は避けたが、頭部にダメージ。
これまた角材と確認。
「アッ…タマキタァーッ！！」
俺の中の種が割れた、気がした。
右で構えている男に一撃。一撃必倒が望ましいが、体勢が崩れていたせいかそういうわけにも行かず相手は起き上がる。
「あーもう！」
ドッガッ
ボクサーのように、ワン、ツー。綺麗に右が入ったおかげでどうにか撃墜成功。
どういうわけか、俺が彼を相手にしている最中に周りからの攻撃を受けなかった。
複数固まっている彼らのほうを見ると、彼らはハッとした様にこっちにいきなり向かってくる。

「アホらし！ド素人との喧嘩はつまらん！！」
脱兎
戦場から逃走を試みる。
・
・
・
「うぐぅ…相打ちってとこすか？」
「喋る余裕があるなら続けるか？」
「いーや、勘弁です」
「俺だって勘弁だ」
「数で負けてるとはいえ、生徒に負けるとはなぁ…。なまったな、俺も」
「いや、多分この世の教師の中ではトップクラスかと…」
「しかし、この勝負。相打ちということだが…喧嘩したからには決着を付けたいな」
「そうですねぇ…でも、皆もうバテバ…お？」
「元気なのが、一組いるな」
「アレに託しませんか？この勝負。どっちが勝ったかで俺たちのどっちが勝ったか決めるってのは」
「悪くないな…。だが、ウチの酒井さんが負けたのって聞いたことないぞ。そっちに分が悪いと思うが…」
「久保だって負けたことありませんよ。何でもありのガチならね」
そんな、会話が生徒と教師の間で飛び交う。
「うぉーい、あんたら生徒と教師の代表みたいだからー！頑張れよー」
松永が大声で久保と酒井に呼びかける。
「何だってぇ！？」
酒井が露骨に驚き、手を休める。
「隙ありゃぁー！！」
ゴキッ

久保がどこから持ち出したか分からない警棒で思いっきり酒井の横顔を殴りつける。
「うひゃーはぁー！」
壊れたような声を上げる久保。地面にダイブする酒井。ある種、というか凄く奇怪な光景だ。
「アレ不味くないか？」
川口が松永に問う。
「どっちかっていうと、久保がな。まったく、主人公チームなんだからもうちょっと綺麗に戦ってほしいよねぇ…」
「主人公チームって何だよ」
そんな会話を続けながら、彼らを見守る川口たち。
・
・
・
ほぼ同時刻。前橋高校2年6組専用バス目前。
「んはぁっはっ…はっ…」
半分パニック状態の前橋高校生徒・教師の渦に飛び込む俺。
後ろには、先ほどの親衛隊と思しき生徒たち。
「・・・」
止まる、俺。周りはしんとしている。いや、正確には違う。だが、俺の五感は何も感じず、ただ、静かだ。
藤本を見る。彼女も、こっちを見る。顔は見える距離のはずだけど見えないことにしておく。緊張がそうさせる。
いったんうつむく。視界には真っ白が広がる。
「何だかんだで、まだ言ってなかったよな」
こいつは独り言。誰にも聞かれていなくてもかまわない。
次は、独り言じゃない。ここにいる皆に聞いてもらわないとかなわない。顔をもう一度上げる。視界には藤本だけが見える。今度は見える。彼女の表情が。
すぅっ

と深呼吸をして声を上げる。
「前橋高校２年６組出席番号４２番藤本優！俺は…
・
・
・
舞台は戻り、上之保学園２年Ｈ組専用バス目前。
「なぁ、どうするよ。俺ら賭けの対象になっちまった」
久保が地面に伏している酒井に話しかける。
「ふん、お前みたいな若造には負けはせんから構わんわ」
「お、強気強気。と、そこでだ。俺たちも俺たちを賭けの対象にしないか？」
「賭けだと？俺とお前が？何の？」
酒井が久保を馬鹿にしたようなトーンで返す。
「そうだな、俺が勝ったら…。校則変えろ。他校生との異性交遊ありにしろ。センセが勝ったらどうするか…決めろ」
「ふむ…。それなら俺は…お前のクラス全員の退学を要求しようか」
酒井が意地悪な笑みを浮かべる。
「面白ぇ…。でも、俺が勝ったら絶対やれよ。校則変ｋおがっ！」
酒井が久保と会話中に竹刀をフルスイング。見事に久保の頬を打ち抜く。
「不意打ちも喧嘩なんだろ？あぁん？」
トントン、と肩に竹刀を乗せてにやける酒井。
「やったなこのハゲェ！」
久保が警棒を振りかざす。
酒井が竹刀を振り下ろす。

第２２話～乾坤一擲～（後書き）

如何でしたか？ホント、どうにか完結できそうです。
次回『第２３話～何で君が締めるんだ～』もどうか、あなた様の時間の都合の許す限り…。

第２３話～何で君が締めるんだ～（前書き）

今回でどうにか完結です。
それでは、どうか最後までお付き合いください。

第２３話～何で君が締めるんだ～

「ホハハハハ！！」
最後まで立っていたのは久保、つまりは勝者が久保。最後で倒れたのは酒井、つまりは敗者が酒井。
ワッと歓声が上がる、歓声の出所は2年H組の生徒集団あたり。同時に教師集団からは「そんな馬鹿な」の驚嘆の声。
「さぁて…」
久保が地に伏してる酒井に向けて、腰をかがめて話しかける。口元に薄ら笑いを浮かべて。
「校則変更の件、了承してもらおうか」
「…フン、お前の言う事を聞いてやるのは癪だが約束を破るのはもっと癪だからな…。まぁ、やってやるさ」
酒井がチッと舌打ちをして了承する。久保はどっこいしょ、などとオヤジ臭い声を上げながら体を起こしその場にどかっと腰を下ろす。
「しかし、あんたはただの生徒指導部長だろ？出来んのか？」
もっともらしい疑問を投げかける久保。
「あんな名前だけの校長やその他くらい大丈夫だろう」
「うは、言うねぇ」
「それで、お前ら。部活、どうするんだ？やめたのは…」
「再入部するしかないだろ。ま、何も規定がないことを願うが…」
「おいおい、大丈夫か？キャプテンだろうが」
二人から笑みが軽くこぼれる。
・
・
・
「俺は、藤本優、お前の事が好きなんだ。愛してる」
言えた、きっと。いや、絶対。後半の台詞を言った記憶はないが、気持ちをそのまま伝えれたのなら間違いはないはず。

バスから出ていた顔はいつの間にか姿を消し、そのあとにバスのドアから彼女の全体像が出る。
とんとんとんと軽く階段を降り、さくさくと雪を踏みしめながらこっちに近づいてくる。
「さっきの良く聞こえなかったから、もう一回言って？」
「・・・」
嫌な女だなぁ、絶対聞こえてるんだよ。これ。
「だから…好kくぁws…」
噛んだ。決め言葉で噛んだ。
「プッ…くく…アッハッハッハッハッ！！」
馬鹿笑いをされた、決め言葉で噛む俺もどうかと思うが、笑う藤本もどうかと思う…。
「ちょっと…待ってよぉ…キャハ…噛むぅ？フツー？セーちゃんって結構駄目人間だよねぇ…」
まぁ、元気なのはいいことなんだが…これはちょっと予定外なんだよなぁ…。
「…悪かったな、駄目人間で」
ちょっと拗ねてみる。俺みたいな男が拗ねたところで可愛くともなんともないが。
「まったく、ホントダメダメっすよ」
「あァ…そうだな」
「ホント、救いがないっすよ」
「あァ…そうだな」
「こんなダメ人間がいくら格好つけたところで一緒ですねぇ…」
「あァ…そうだな」
何か、ボロクソ言われてるぞ。俺。噛んだくらいで。いや、噛むってのはそんだけ酷い事なのかなぁ？
しかし、へこんでくるなぁ…。あんまりじゃねぇか。
そんな彼女は呆れた顔でため息。そして、一呼吸間隔を置く。
「…まぁ、そんなダメ人間に付き合える女の子は私しかいないかも

ね～♪」
「・・・ほ？」
思わず間抜けな声が漏れる。
「同情票、ってことでそんなダメな貴方にチャンスをあげます」
「チャンスぅ…？」
ぴんと来ないのは俺が悪いのか彼女が悪いのか。
「私に感激するような愛の言葉をください♪」
さっき格好つけても一緒だと言ったのはどこのどいつだか…。
軽くため息をついて、その後気合を入れる。
彼女の制服の裾を掴み、くいっとこちらに引き寄せる。
ギュッ
んで、抱きしめてみた。ホント、動機なんてないんだが。何となく、反射で。
「ちょっ！要件を満たして…」
彼女がじたばたする、が、声のトーンからすると別に嫌ではないようだ。
「別に俺はゆっちゃんの言った事を了承した覚えはないけどな」
ちょっといたずらっぽく言う。
「沈黙はＹＥＳととるのが社会のルールです！ですが…」
彼女は続ける。
「まぁ、感激したのは、事実です。うん。つーかね、大体ねぇ！」
彼女の他人行儀が崩れるときがきたようだ、それはともかくとして彼女は続ける。
「迎えに来るの遅すぎなんすよ！何考えてんですかセーちゃんは！バカじゃないんですか？」
「い、いや…あのねぇ…」
いきなり噴火されても困る。
「ホント！ずっと待ってたんだよ？ホントさぁ…」
何かいきなり切れられても困る。つーか、どーでもいいが勝手じゃないか？こいつの言い分。

「でも…」
彼女は何かを言おうとして止める。そして、また気を取り直して言い始める。
「でも、まぁ、こうやって来てくれたし、抱きしめてくれてるし、暖かいし…。許すけどね」
外は寒い。雪もちらついてきている。
その背景設定のおかげか、俺たちの体からリアルに湯気が立ってきた。やかんか、俺らは。
「まぁまぁ、そういうわけで！」
横から割り込む性格の悪い声。そして、超！超！超！！大声で叫ぶように岡部は言う。
「誓いのキスを！！」
「「「誓いのキスを！！！！！」」」
それに便乗するように周りから叫ばれる。口笛を吹く者、馬鹿笑いする者、泣く者エトセトラエトセトラ・・・
表情は多々あれど、皆、祝福心の底では俺たちを祝福してくれているのが分かる。ありがとう、皆。死にたくないが、死んでもいい。
キィィィィィーン！！！！！
耳鳴り、じゃなくて実際の金きり音。マイクのアレ。
『はいはい、それではぁ～♪』
おっとりと間延びした声、声の主はきっと…いや、確実に高見さんだ。
ビッ
と右手を俺たちの方向に指して、一言。
『右手に見えますのが、熱々カップルでございまぁ～す♪♪』

第２３話～何で君が締めるんだ～（後書き）

如何でしたか？今回で一応、最終回とさせて頂きます。もしかしたら、短編でその後を書くかもしれませんが。
ここまで付き合って下さった皆様には本当に足を向けて寝れません。
本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3975a/

男子校を恋愛で

2010年10月10日03時04分発行